

### Ⅲ．制作者に着目した文化遺産の研究

## 高橋源吉と山寺

大場詩野子・小林俊介

#### 1. はじめに

山形県内には、高橋源吉という明治時代の画家の油彩画が企業や個人宅などに残されており、11点の作品について所在がわかっている。画題は山形県内の風景が中心で、山寺の天華岩や寒河江市の臥龍橋などの名所を描いたものが多い。高橋源吉（1858－1913）とは、実は重要文化財の《鮭》や《花魁》を描いた高橋由一の息子であり画家である。父の由一や外国人画家フォンタネージから当時最先端の油彩画教育を受けた源吉は、明治前期の中央画壇で画家として、また論客としても活躍をした人物であった。しかしその晩年は東京を離れ消息を絶ち、妻のたかとともに放浪生活を送り、最後は石巻で客死している。その足取りについて詳細は不明だが、途中山形を少なくとも2回訪れており、県内に存在する作品群はその来形時に描かれたものである。

そもそも父の由一については、日本における近代洋画への道を切り開いたあらゆる功績とその独特の油彩画技術が現在では高く評価され、これまで様々な角度から多くの研究が行なわれてきた。また、東北地方での新道の記録画制作や、富豪達の肖像画制作などの活動により、山形県と深くかかわりがあることもよく知られている。一方で息子の源吉は、近年、由一との共同制作や天絵学舎の共同経営などの観点から、東京での活動や作品に光が当て始められてはいるが、本格的な研究はまだ始まったばかりである。

そこで本研究では、県内に残された11点の作品についてその画題や、来歴、制作背景などを明らかにすることで、源吉の晩年における山形での活動を探ることにした。また、これらの油彩画に使用された制作材料と技法を明らかにすることで、源吉の油彩画の特徴をとらえることにした。源吉は山寺において、いかなる人物とかかわりを持ち、どのように絵を描いたのか。源吉の作品は本プロジェクトの対象地域外に存在するが、その作品のうち《臥龍橋》は六十里越街道の要衝である白岩の臥龍橋を描いたもので、西村山地区との関連も深い題材である。これらの作品は、このこれまで注目されることの少なかった高橋源吉という画家自身の存在はもとより、明治期の洋画表現の一端と地域におけるその受容を具体的に伝えるものとして貴重であり、まさに山形県の重要な地域文化遺産であると考えている。このうち本稿では、源吉が2回目の来形の折に行なった山寺での展覧会とその出品作を中心に考察したい。

#### 2. 作品概要

まずは、山形県内に存在する高橋源吉の作品を以下の表3-6に示す。このうち、⑩《本合海》はこのたびの調査において新たに発見されたものである。以下に述べる絵画寸法や制作材料および技法の特徴が他の作品と共通していることから、源吉の作品であると判断した。

所蔵者は個人や企業が多く、現在山形市が所蔵する③《宮城縣穴瀑之紅葉》、④《天華岩》、⑦《藤花滝》についても、以前は山形市山寺在住の伊澤家とその親族が所有していた。また、これらの作品のうち、1911年（明治44）に山寺の立石寺根本中堂で行なわれた展覧会（以下、山寺展と称す）の出品作である可能性の高い作品は、当時の新聞記事に掲載された作品名や来歴から、③、④、⑤、⑥、⑩であると考えられる。来歴の詳細は後述する。

表3-6 山形県内に存在する高橋源吉の作品

| 作品番号 | 作品名              | 署名               | 寸法(タテ×ヨコcm) | 所蔵者       | 旧修復 |
|------|------------------|------------------|-------------|-----------|-----|
| ①    | 臥龍橋              | G.TAKAHASHI 1902 |             | 山形銀行      | 有   |
| ②    | 楠木正行如意輪堂に和歌を残すの図 | G.TAKAHASHI 1902 |             | 個人蔵       | 有   |
| ③    | 宮城縣穴瀑之紅葉         | G.TAKAHASHI      | 31.5×49.5   | 山形市       | 無   |
| ④    | 天華岩              | なし               | 69.9×151.6  | 山形市       | 無   |
| ⑤    | 山寺全景             | G.TAKAHASHI      | 68.0×149.5  | 将棋むら天童タワー | 有   |
| ⑥    | 立谷川 対面石          | なし               | 68.0×149.6  | 将棋むら天童タワー | 有   |
| ⑦    | 藤花滝              | なし               | 90.8×72.7   | 山形市       | 無   |
| ⑧    | とら               | G.TAKAHASHI      | 45.0×70.0   | 天童市立荒谷小学校 | 無   |
| ⑨    | 大石田風景(仮題)        | G.TAKAHASHI      | 38.9×67.0   | 個人蔵       | 無   |
| ⑩    | 本合海              | なし               | 70.1×151.5  | 個人蔵       | 無   |
| ⑪    | 腹巻岩              | G.TAKAHASHI      | 41.5×72.5   | 個人蔵       | 無   |

署名、年記については、記載されているものとされていないものがある。署名はいずれもローマ字で、画面下に大文字でG.TAKAHASHIと書かれている。源吉の署名は、県外の作品ではこのほかに、漢字で右から高橋源吉と表記する場合や、柳姓でG.YANAGI. と表記する場合、単にG.Tと頭文字だけを記入する場合と、いくつかのパターンがあるが、時代や制作状況、依頼者などの条件により使い分けていた可能性もあり、今後の詳細な検討が必要と思われる。

年記は、①《臥龍橋》と②《楠正行如意輪堂に和歌を残すの図》にのみ画面に1902と記載されている。③《宮城縣穴瀑之紅葉》は、後世の処置により裏面に取り付けられたベニヤ板に、源吉以外の手による作品名と年記、作者名の記載がある（図3-38）。オリジナル裏面の観察はベニヤ板が一部接着されているため困難だが、同様の記載がされている可能性がある。

画面寸法は、長辺が150cm前後の大型の作品と、それ以外の小型の作品に大きく分けられる。⑦《藤花滝》のみF30号の定型サイズで、画面は縦構図で使用されている。それ以外は定形外寸法で、海景型サイズよりも横長の作品が多く、画面は横構図で使用されている。④《天華岩》、⑤《山寺全景》、⑥《立谷川 対面石》、⑩《本合海》はそれぞれ誤差があるものの、同寸法とみてよい。

このような横長の画面は源吉の父である高橋由一の作品にも多く見られるものであり、その理由として明治期における伝統的な和風建築の欄間への設置を想定していると考えられている<sup>121</sup>。源吉の作品に規格外で横長の作品寸法が多いことは、このような由一の作例を踏襲していることと、根本中堂という社寺建築の内部に展示することを想定しているためと予想される。

次に、作品に使用された画材について、調査対象作品の中には、これまで本格的な修復処置を受けることなく現在に至っているものがある。これらは制作当初の部材や構造が大きく変更されることなく、そのまま維持されており、源吉が山形での制作に使用した画材の特徴を示しているといえる。例えば、木枠の組み合わせ部分については、④《天華岩》と⑨《大石田風景（仮題）》⑩《本合海》に共通した構造が観察された。図3-39に示すよう

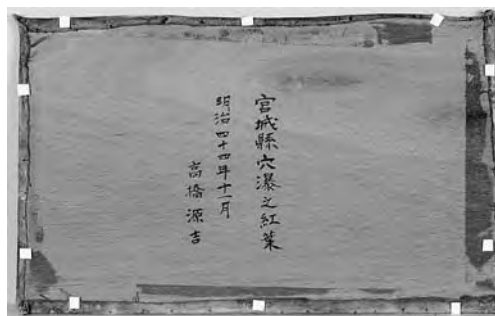


図3-38 《宮城縣穴瀑之紅葉》裏面

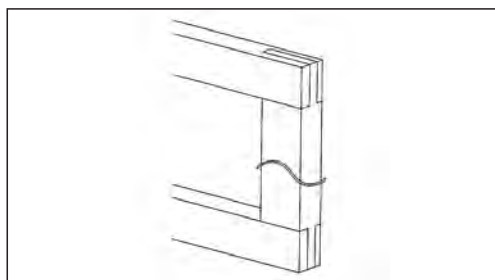


図3-39 《天華岩》と《大石田風景（仮題）》、《本合海》の木枠の構造



図3-40 《天華岩》の楔



図3-41 《大石田風景（仮題）》の楔

に、端を凸型に加工した左右枠が凹型に加工された上下枠に差し込まれている。また、楔は小さな三角形の形をしており、木枠内側を斜めに切断されて作られた楔穴か、上下枠に穴けられたホゾ穴に差し込まれている（図3-40、41）。以上のような木枠と楔、楔穴の構造は、源吉の作品に特徴的なものであり、作者を同定する物質的な要件や、作品の制作年代を特定するための検討材料としてとらえることができる。

制作技法については、画面全体を原則として遠景から近景へと描き進めている点で、『油絵導志留辺』<sup>122</sup>に記されている旧派の技法を踏襲している。例えば図3-42に示すように、《宮城縣穴瀑之紅葉》では、空と雲が描かれた後に、手前の樹木が描写されている。同作品の他の部分や、またほかの作品においても、モチーフの境目を観察すると、おおむねこのように遠景から近景へと描き進められている。また、画面は下層塗りと上層塗りで構成されているものの、上層塗りに関して『油絵導志留辺』に記述され、源吉の父の由一も用いたグレイジング技法<sup>123</sup>は使われていない。

以上のように高橋源吉の作品では、作画手順は旧派の技法を踏襲している一方で、油絵具の透明性は利用

していないことが特徴である。絵具の盛り上げやグレージング技法を用い、徹底的な質感描写へのこだわりを見せる由一作品に対して、源吉の作品の特徴はむしろ、画面全体の構図や形態、色彩のバランスに留意しながら、様々なモチーフを要領よく描き分けていく点にある。

また、保存の観点からいえば、以上のような手順で描かれた絵具面は、制作後、環境の変化しやすい一般家屋などで100年余り保管されていたにも関わらず、絵具のつきがよく、重大な傷みを伴っているものは少ない。この理由として、油絵具に十分な乾性油が混ざれていることが挙げられ、源吉が、油絵具の性質を理解し確実に使いこなしていることが伺える。

各作品の画題、来歴、保存状態については、以下に詳述する。なお山寺地区の地名については以下の地図(図3-43)を参照されたい。



図3-42 《宮城縣穴瀑之紅葉》部分写真

### (1) 臥龍橋

**画題：**臥龍橋は、湯殿山参詣の道である六十里越街道沿いにあり、寒河江川を隔てて白岩地区と左澤地区を結んでいる。江戸時代から明治にかけて、幕領である白岩からの米納や、湯殿山および三山参詣者による交通が盛んに行われた場所である。

臥龍橋の歴史は、江戸初期に白岩領主である酒井長門守が現在の場所より200mほど上流の緒熊淵に架橋したことに始まる。その後、流出と架橋を繰り返し、1827年(文政10)に現在地に橋が架けられた。当初は江戸時代の土木技術の集大成とされる、橋脚を組まない木製の刳(はね)橋式で架橋された。1858年(安政5)に架け替えられた刳橋式の臥龍橋が菊地新学によって1880年(明治13)頃に撮影され(図3-45)、1881年の明治天皇東北御巡幸の際、展覧に供されている。1889年(明治22)に木製の木拱(もくきょう)式となり、さらに1937年(昭和12)にコンクリート製のアーチ式となって現在に至っている(図3-46)。作品に描かれているのは、1889年に架橋された木拱式のものである。



図3-43 山寺地区と地名

臥龍橋という名称は、1828年（文政11）、白岩村の医師で学者の高橋礼輔が名づけたとされているが、それ以前や以後にも龍脊橋、陣峯橋、白岩橋などと、その姿や架橋場所などにちなんで様々な呼び方がされた。臥龍橋の名が定着したのは、1889年（明治22）、刎橋式から近代的なアーチ式の木拱式に架け替えされた際だと考えられている<sup>註4</sup>。

作品の構図は中央の橋とその下を流れる寒河江川を挟んで、画面右手に南岸の左澤地区が、左手に北岸の白岩地区へと続く岩壁の切り通しが描かれる。写生をもとに作品制作を行ったとは考えにくく、他の作品と同様、写真を参照したと考えられる。川の流れは実際とは逆向きに描かれていることも、忠実な写生でないことを裏付ける。ただし、同構図の写真は現在発見されていない。左手に切り通しのある構図は、『山形県名勝誌』（山形県庁、1908年）の掲載写真《臥龍橋》（図3-47）や、1913年（大正2）寒河江会場での山形県農産品評会記念アルバム掲載の臥龍橋の写真（図3-48）に近いものの、樹木や河岸の砂利の形状が異なっている。

**来歴：**現在、山形銀行天童支店（旧天童銀行）が1961年（昭和36）に改修された折に発見されたが、旧天童銀行に昭和はじめまで掛けられていたという<sup>註5</sup>。天童銀行創立は1901年（明治34）であり、創立記念などで収蔵された可能性もある。山形市で源吉を世話したとされる奥平直則（1923年没）は山形銀行の前身である両羽銀行の行員であり、同作品収蔵に関して何らかの関係があったと推定される<sup>註6</sup>。

**保存状態：**ワックスによる裏打ちが行なわれている。また、作品裏面には湿気などの防止を図ったと思われる防湿用のパネルが取り付けられている。額はその修復時にアクリル製のグレージングと裏蓋がついた箱額に新調されており、画面の一部がグレージングと接触しているため、早急な応急保存処置が必要である。



図3-44 《臥龍橋》



図3-45 臥龍橋（菊池新学撮影）



図3-46 現在の臥龍橋（2012年撮影）



図3-47 山形県名勝誌に掲載された臥龍橋の写真



図3-48 山形県農産品評会記念アルバム掲載の臥龍橋の写真

## (2) 楠正行如意輪堂に和歌を残すの図

**画題：**楠木正行（不明－1348）は南朝の武将楠木正成の長男で、小楠公とも言われる。父の正成とともに反幕府勢力として活躍し、天皇に忠義を尽くしたことから、明治時代から第二次世界大戦終了時まで、国策によって日本第一の忠臣とされた。本作品に描かれた情景は、『太平記』巻26にある以下の逸話を題材にしている。北朝の高師直との一戦の前に死を覚悟した正行は、先帝の後醍醐天皇陵に参拝し、奈良吉野の如意輪寺本堂の扉に辞世の句を矢尻で刻んだ。

明治20年代前半くらいまでの歴史画には、天皇に忠誠を尽くした歴代の忠臣が好んで取り上げられており、本作品と画題を同じくするものに、高橋由一が宮内省からの下命で制作、献上した油彩画《楠正行如意輪堂に歌を題するの図》<sup>注7</sup>（図3-50）および、その下図と考えられている水彩画《如意輪堂に於ける小楠公図》<sup>注8</sup>（図3-51）がある。両者を比較すると本堂扉の角度、後方に描かれた大木の形や枝ぶりなど細部の構成が異なっているが、本作品は後者に近く、下図の構図を踏襲した可能性がある。

**来歴：**山形市小立の松原さん所蔵であったが、同女の義姉（夫の姉トク）の嫁ぎ先であった柴田清作は、奥平家が山形市七日町の大通り沿い、当時の山形市横南町（現在の山形市本町一丁目と十日町一丁目の境目）に経営する靴店の使用人であり、作品は奥平家から譲り受けたものであるという。奥平は源吉来形時に住居に困っていた源吉夫婦に住居を世話したといい、作品はその際のお礼として譲り受けたという<sup>注9</sup>。

**保存状態：**2001年（平成13）に修復が行なわれ、ワックスによる裏打ちと木枠の交換が行なわれている。また、額にはグレージングが取り付けられている。裏蓋はなく、作品裏面に《臥龍橋》と同様に防湿用パネルが取り付けられている。



図3-49 《楠正行如意輪堂に和歌を残すの図》



図3-50 高橋由一作《楠正行如意輪堂に歌を題するの図》



図3-51 高橋由一作《如意輪堂に於ける小楠公図》

### (3) 宮城縣穴瀑之紅葉

**画題：**現在では姉妹滝と呼ばれているが、かつては穴瀑、夫婦瀑布とも呼ばれていた。山寺より二口峠を経て仙台市にいたる街道の途中にあり、同街道沿いにある磐司岩、秋保大滝などを含めた名取川上流一帯が現在では二口峡谷とされている。現在は宮城県に属しているが、秋保大滝は慈覚大師が大滝不動堂を建てた霊場であり、この地域は当時、かつての山寺の寺領であった意識から「奥山寺」として山寺の名所として認識されていた。

本作品は1910年(明治43)に保硯会から発行された『山寺名勝案内』に掲載された夫婦瀑布(図3-53)と同構図であり、源吉はこの写真を参考に制作を行なったと考えられる。ただし、名勝案内に記載された写真は約4×6cmと小さく細部が不明瞭であることから、実際には同構図の写真プリントや絵葉書を用いた可能性もある。

**来歴：**2010年(平成22)より山形市の所蔵だが、それ以前は山寺の伊澤家の分家である伊澤友明氏の所有であり、同氏の祖父で明治44年当時、山寺展を企画した山寺村村長の伊澤不忍の弟の伊澤要三郎氏が購入したと伝えられている。要三郎氏は当時山寺村役場の助役を務めていたという<sup>註10</sup>。制作年について、作品裏面にあてられたベニヤ板には「宮城縣穴瀑之紅葉 明治44年11月 高橋源吉」(図3-38)とあることから、この作品は1911年(明治44)10月20日から11月5日まで開催された山寺展の会期中か、終了後に制作された可能性がある。もしくは購入時期を示しているかもしれない。ただし、以上は、ベニヤ板が新しく、記載された文字が源吉以外の手によるものであるため、さらなる検討が必要である。

**保存状態：**後世の処置で木枠から外され、裏面にベニヤ板があてられている。支持体とベニヤ板は一部接着されている。支持体は波打ち状の変形が生じており、変形箇所、絵具層の亀裂や剥離、欠損がわずかに見られる。それ以外の部分では絵具の固着状態はよいが、支持体が木枠に張られておらず不安定な状態であることから、今後、展示や取扱いの際に上記の痛みが進行する可能性がある。早急な処置が必要である。



図3-52 《宮城縣穴瀑之紅葉》



図3-53 山寺名勝案内に掲載された夫婦瀑布

### (4) 天華岩

**画題：**天華岩(てんぐいわ)は、立石寺宝珠山山腹の西端斜面に直立する岩体である。長楕円形の風化穴のある凝灰岩独特の形状をしており、この天華岩をはじめとする奇岩怪岩は立石寺への信仰と結びついて宝珠山の聖域を作り出した。

天華岩の名称については、『山寺名勝志』(1908年出版)では天狗岩と表記されるが、1925年(大正14)に再版された同書では、天花岩と表記され「俗に天狗巖ともいふ」とある。

構図は、前景に宝珠山の西側から見た天華岩を配し、後方中景に二口峠に通じる馬形地区が描かれている。この地点からの天華岩の姿は、現在、多くの観光客が目にする山寺駅の南側から宝珠山を正面に見据えた場合の形状とは異なり、より量塊性のあるものとなっている。このような構図選択には、当時、山寺展の手引きをした伊澤栄次(不忍)氏の強い意向が反映されており、伊澤をはじめとする有力者によって山寺の保存と振興を目的に組織された保硯会(ほりゅうかい)の写真(図3-55)がもとに制作された可能性が高い。二口峠は宮城県の秋保を経て仙台へといたる街道で、古来より荷物の運搬や、江戸時代からは出羽三山や山寺、松島への参詣に使用された。しかし、1882年(明治15)の関山新道開通後は、ほとんど使われなくなった。

来歴：山寺展出品作と考えられ、現在は山形市所蔵であるが、2002年（平成14）まで山形市山寺伊澤家の所蔵であった。「山寺での展覧会の出品作で、売れ残っていたものを（伊澤栄次が）引き取った」との口伝が残る。

**保存状態：**額は当初のものと思われる。作品は、画面全体に褐色の物質が付着しており、本来の色調が失われている。木枠と支持体裏面には水性の染みが多く見られ、木枠にはススが付着し黒変している。また、支持体に破れや変形があり、破れの箇所は裏面から紙があてられ、表面から塗料が塗られている。

旧所蔵者である伊澤家は、かつては茅葺き民家で現在までに何度か改装や増築を経ており、昭和40年代までは屋内に囲炉裏があった。画面の変色や水染み、ススの付着は、囲炉裏の煙や雨の影響を受けたためと考えられる。しかしそのような環境下で長期間保管されていたにも関わらず、絵具の固着状態がよい。



图3-54 《天華岩》



図3-55 山寺名勝案内(1910年)  
に掲載された天華岩

### (5) 山寺全景

画題：山寺立谷川河畔の田楽淵（でんがくぶち）<sup>注11</sup>付近から根本中堂方面を眺めた景色を描いている。

構図は、保聖会出版物に記載された写真の中では、『山寺名勝案内』（図3-57）に掲載されたものが一番近く、白く塗られた高橋の欄干<sup>註12</sup>が克明に描写されている。立石寺への参詣道である高橋は何度も架橋が繰り返されているが、そのはじめは田楽淵に架けられたという<sup>註13</sup>。また、高橋がかかる以前は、南院と中島間で立石川を渡し、次に山王院と千手院間で楓川を渡るという、いわゆる寺街道が参詣に用いられていた<sup>註14</sup>。したがって慈覚大師が山寺へ入場した当時は、高橋は存在しなかったことになるが、かつて高橋のかかっていた田楽淵から白く光る新しい高橋を眺めるこの視点には、俗世から神仏の住む宝珠山への架け橋という認識と、慈覚大師の山寺入場のイメージとを重ね合わせているように思われる。

**来歴：**株式会社天童タワーの初代社長である山口清氏が、1955年（昭和30）頃、洋画家の堀尾芳克氏（1907－1960）より《立谷川 対面石》とともに購入したといわれている。堀尾は福岡県生まれで、雅号を亀岩とし、奥山寺に山小屋をアトリエとして制作に勤しんだ。人柄よく、山寺の住民に受け入れられ、現在、宝珠橋のたもとで経営されている「お休処 対面石」には、酒代や食事代として置いていったという油彩画が残されている。1960年（昭和35）12月14日に吹雪の中遭難して他界した。享年53歳。山寺に居住していたことから、本作品や《立谷川 対面石》と関わりを持ったと考えられるが、その詳細については不明であり今後の課題である。



图3-56 《山寺全景》



図3-57 山寺名勝案内（1910年）に  
掲載された写真

**保存状態：**表具師による修復が行なわれている。地塗りのあるキャンバスで裏打ちされ、木製パネルに張り込まれている。額は新調されている。

#### (6) 立谷川 対面石

**画題：**慈覚大師が寺院建立の了解を得るため、この地域を住处とする狩人の磐司磐三郎と会談したという伝説の残る対面石と、そこから立谷川を挟んで対岸の芦沢峠方面を眺めた景色を描いており、慈覚大師が三宝岡の風立寺から芦沢峠を通して山寺へ入ったという伝説を想起させる構図となっている。対面石の傍らに描かれた榎（えのき）の木は「山寺七木」の一つであり、洪水で流失したとされ、現存しない<sup>注15</sup>。背景には明治から昭和にかけて石材採掘の好景気に沸いた山寺の採石場であった「たて山」が描かれる。

本作品も、『山寺名勝案内』に掲載されている写真（図3-59）と同様のものを参照した可能性が高い。しかし、前景の対面石と背景のたて山の間隔は写真よりも広く、横長の作品寸法に合わせて構図を操作したことが伺える。

**来歴：**《山寺全景》と同様に、株式会社天童タワーの初代社長である山口清氏が、1955年（昭和30）頃、堀尾芳克氏より購入したといわれている。

**保存状態：**《山寺全景》と同様の状態である。表具師による修復が行なわれている。地塗りのあるキャンバスで裏打ちされ、木製パネルに張り込まれている。額は新調されている。画面全面に鱗状の細かい亀裂と剥離と欠損が発生しており、支持体の欠損や補彩も見受けられる。とくに空の部分は欠損箇所が多く、広範囲に補彩されている。



図3-58 《立谷川 対面石》



図3-59 山寺名勝案内  
(1910年)に掲載された写真

#### (7) 藤花滝

**画題：**『山寺名勝志』によれば、藤花滝は、面白山四十八瀑の一つ。面白山は山形市と仙台市の県境にある奥羽山脈中の火山で、仙台側から見ると面が白く見えることから、面白山と名付けられた。立石寺から東へ12kmほどのところにあり、山寺を流れる楓川の流源であり、山寺三大奇景の一つとされる。また、慈覚大師が山寺を開くにあたり、まずこの面白山から着手したとされている<sup>注16</sup>。

構図は、対象作品のなかで唯一の縦構図で、右斜め方向から見た藤花滝が描かれているが、保硯会が出版した書物に掲載されている藤花滝の写真は、滝を正面から捉えているものしかない（図3-61）。また、本作品は別の絵を塗りつぶして制作されており、X線透過画像からは、文机で書物を読んでいる着物姿の男性が横構図で描かれていることがわかる（図3-62）。この絵を覆い隠すように厚く塗られたナイフ痕や筆痕を残した荒い筆致は、本作品のみにみられる特徴である。

**来歴：**天華岩と同様に、2002年（平成14）まで、山形市山寺伊澤家の所蔵であり、山寺展の売れ残りといえられている。

山寺展を報じた新聞記事<sup>注17</sup>には、「高橋氏が作品たる天狗岩、山寺風景、面白山瀑布、最上川等は何れも運筆の自由と配色、光線の宜しきを得真に迫りたる佳作なり」とあり、ここに記された「面白山瀑布」が本作品を指している可能性がある。しかし、先述のように、唯一の縦構図の作品であること、保硯会が出版し

た書物にある藤花滝の写真には同構図のものがないこと、別の絵を塗りつぶして制作されていることなどから、他作品との相違点が多いため、詳細な検討が必要である。

**保存状態：**画面全体に経年による亀裂が発生しており、剥離している部分もわずかにある。画布の張りが弛んでバタついているため、取扱いの際に亀裂や剥離が進行する可能性がある。また、天華岩と同様に、画面全体に褐色の物質が付着しており、本来の絵具の色彩が判断できない状態になっている。



図3-60 《藤花滝》



図3-61 山寺名勝案内（1910年）  
に掲載された写真



図3-62 藤花滝のX線透過画像

#### (8) とら

**画題：**灰色の空を背景に画面中央に虎が描かれている。この作品の参考となった資料はまだ発見されておらず、今後の課題としたい。

**来歴：**本作品が所蔵されている天童市荒谷小学校は、かつて山寺小学校の分校であり、《とら》は源吉が山寺で学校の教材用にと依頼され描いた、3枚の動物の絵のうちの1枚だという<sup>注18</sup>。ほかに象の絵が山寺小学校にあったが、事情を知らない人が画面を塗りつぶしてほかの絵を描いてしまったと伝えられており、現在は所在が不明である。

**保存状態：**木枠から外され、裏面にはベニヤ板があてられている（図3-64）。支持体に波打ち状の変形と小さな破れがある。他にも絵具の亀裂、剥離、欠損が発生している。



図3-63 《とら》



図3-64 裏面にはベニヤ板があてられている

#### (9) 大石田風景（仮題）

**画題：**所有者である戸田家では、大石田の風景が描かれていると伝えられているが<sup>注19</sup>、詳細は不明。

**来歴：**現在写真館を営んでいる戸田家では、銀行からもらったと伝えられている。1931年（昭和6）に死去した戸田家の2代目は大石田銀行<sup>注20</sup>の支配人であり、3代目は源吉が山形に滞在した明治末に20歳で自転車店を開業、15年後には写真館を始めたという<sup>注21</sup>。

**保存状態：**額は当初のものと考えられる。作品は、画面全体が汚れて覆われているため、褐色調の色調を呈しているが、額に覆われた部分では明るい灰色調の色彩が確認される。汚れ以外の痛みはなく、絵具の固着もよく保存状態は良好である。



図3-65 《大石田風景 (仮題)》

#### (10) 本合海

**画題：**本作品は、このたびの調査において、新たに発見された。

本合海は、最上川の中流域に位置し、酒田から大石田へ上るルートの途中にある。北流してきた最上川が八向山に当たって西向きに大きく迂回するこの地点は、舟運の中継地として、また陸奥国へ抜ける陸上交通の要地として栄えた場所である。源頼朝に追われた義経が平泉に逃れる途中、清川より舟で最上川を遡り上陸した地と伝えられ、松尾芭蕉が奥の細道で庄内まで舟で下った際の乗船地としても知られる。

この地を起点として1878年（明治11）に岩根新道、1878年および1880年（明治13）には本合海新道が開鑿され、これら新道の記録画が1884年（明治17）に高橋由一によって制作されている（図3-67）。本作品は由一が写生した地点（図3-68）より北側の、現在、義経上陸の碑が建立されているあたりからの眺めを描いたものと思われる（図3-69）。画面左手に白く描かれた山が日山であるというのもこの視点を裏付ける。

**来歴：**現在、山寺ホテルに展示されていること、寸法、額や木枠の構造、支持体と地塗りの特徴が、《天華岩》と同様であることから、《天華岩》と同時期の1911年（明治44）に山寺展出品のために制作されたとみてよい。

**保存状態：**額は当初のものと思われる。画布の上辺が木枠から外れており、下方向にたるみが生じている。破れも見られ、補修の痕がある。画面全体に縦方向の亀裂が発生しており、画面下部には亀裂に伴った剥離と欠損が集中している。裏面には、埃が大量に付着している。全体として痛みがひどく、早急な手当てが必要である。



図3-66 《本合海》



図3-67 高橋由一作  
最上郡元合海村ト蔵岡村ノ間  
最上川渡船場ノ図



図3-68 由一の写生地点  
(2013年撮影)



図3-69 源吉の写生地点  
(2013年撮影)

### (11) 腹巻岩

**画題：**このたびの調査において、最上峡の風景、庄内町清川地内から腹巻岩方向を見た風景であることが判明した。腹巻岩は、最上川と立谷沢川の合流地点にある巨巖である。画面右手に描かれた崖が腹巻岩であり、源頼朝に追われた義経の伝説が残る場所でもある。それによれば、岩の横縞の腹巻のような模様から、義経とともに最上川を渡った弁慶が腹巻を乾かした場所とも、腹巻が風で飛ばされて張り付いたとも言われる。

最上川を酒田から本合海へ上るルートの中にあるこの場所は、古くから舟運の難所であった。享保年間には舟事故防止のため、川底から突出した岩盤を一部爆破したと伝えられている<sup>注22</sup>。しかし、1878年（明治11）に磐根新道が開通して後は、車馬で行き来できるようになり、さらに1913年から翌年にかけて酒田線（現陸羽西線）が開通したことで、舟運は徐々に廃れていった。

右手に描かれた腹巻岩は『山形名勝記』（菊地清著、清水清吉発行、1901年）の掲載写真「八白山ヲ望ム」（図3-72）が参照されていると考えられる<sup>注23</sup>。筆触は1902年（明治35）の年記のある山形銀行蔵の《臥龍橋》の筆触と共通性があると指摘されている<sup>注24</sup>、また制作年は『山形名勝記』が1901年（明治34）の刊行であることから、1902年前後と考えることも可能であるが、1911年（明治44）の来形時の制作である可能性もあり、検討の余地がある。

由一の三島県令道路改修記念画帖では、本作品の地点とは逆方向の戸沢村揚巻地内から見た腹巻岩が描かれており（図3-71）、同画帖で由一の下絵から版画を制作した源吉は、由一と同一地点からの写生を避けたと考えられる。図3-73に源吉の写生地点を示す。

**来歴：**「丸山」長谷川家（山形市三日町）所蔵。二代目当主である吉三郎氏（1865－1933）が入手したと考えられている<sup>注25</sup>、同家のコレクションに洋画の趣味はなく「もらい物」であるという<sup>注26</sup>。吉三郎は山形銀行の前身である両羽銀行の頭取を務め、山形市立商業高校の創立者でもあった人物。山寺展出品作の可能性があると詳細は不明。

**保存状態：**平成25年度調査予定



図3-70 《腹巻岩》  
朝日新聞山形版（2000年10月28日）30面より転載



図3-71 高橋由一作  
《最上郡磐根新道ノ内草薙村  
字腹巻岩ノ図》



図3-72 八白山ヲ望ム



図3-73 源吉の写生地点  
（2013年撮影）

## 3. 源吉の来形と背景

### (1) 源吉の来形

源吉の来形は少なくとも2回あったと考えられる。1回は源吉作の《臥龍橋》（山形銀行蔵）と《楠正如意輪堂に和歌を題するの図》の年記がある1902年（明治35）頃、もう一回は源吉が山寺の根本中堂で展覧会を開いた1911年（明治44）である。

源吉の1902年（明治35）の来形に関しては不明な点が多い。来形の契機としては、1901年（明治34）の明治美術会の改組で源吉が東京での発表の足場を失ったことや、同年の奥羽線開通、および山形での奥羽六県北海道連合物産共進会の開催などによる地域の活性化などが推定されるが、なお調査が必要である<sup>注27</sup>。

1901年（明治34）に山形市内に「西洋美術館」なる催しがあったというが、源吉との関連についても調査する必要がある<sup>注28</sup>。

## （2）山寺展概要

新聞報道によれば、源吉は1911年（明治44）春には来形し、5月の山形大火を契機に山寺へ移住した<sup>注29</sup>。また、源吉は同年五月の山形市の大火に遭遇し、仙台へ出るための資金を調達するために立石寺で個展を開いたと伝えられている<sup>注30</sup>。実際、源吉は展覧会の「閉会後は同地を辞し出羽の富士たる鳥海山の風光に接し親しく実景を写し、更に松島方面へ転ぜらるゝ予定なり」と報じられていることから<sup>注31</sup>、この後石巻で1903年（明治36）に没するまで予定の行程をたどった可能性は高い<sup>注32</sup>。

山寺展は1911年（明治44）10月20日から11月5日まで山寺根本中堂を会場に開催された<sup>注33</sup>。根本中堂の前には「特別保護建築」及び「油絵展覧会」と「筆太に書いた」看板が掲げられていた<sup>注34</sup>。「会場は根本中堂の左右れう郭〔ママ〕にして出陳点数約五十点余」<sup>注35</sup>と報道されていることから、根本中堂の外陣に作品が展示されたとみてよい。

山寺展の世話は当時の山寺村長伊澤栄次によって行われていた。新聞報道によれば同月16日には「山形市の日刊四新聞社より記者一名づゝ来遊し明二十日より開催すべき展覧会の下見をなしたる後山寺館〔山寺ホテル〕に於て伊澤村長より午餐の饗を享けて帰形せり」<sup>注36</sup>とあり、実際10月18日以降山形日々新聞、山形新報、山形新聞にそれぞれ同展の紹介記事が出ている。同月19日の『山形新報』には「会場には画伯夫妻の外壬生法田〔芳田、立石寺第六七世貫主、筆者註〕師及伊澤山寺村長諸氏縦覧者を歓待しつゝありき」<sup>注37</sup>と報じている。

出品作は新聞報道によれば、源吉が新たに描いた山寺関連の風景画と「動物の大幅」<sup>注38</sup>に加え、高橋由一の作品や書類、画本など参考品を加えたものであった。山寺関連の風景画について『山形日々新聞』は「山寺油絵展覧会▲参考品頗る多し」<sup>注39</sup>と伝え、「高橋源吉氏が入神の作になる宝珠山の勝景数面〔中略〕高橋氏が作品たる天狗岩、山寺風景、面白山瀑布、最上川等は何れも運筆の自由と配色、光線の宜しきを得真に迫りたる佳作なり」<sup>注40</sup>と具体的に報じている。「天狗岩」は伊澤家に伝えられ現在山寺芭蕉記念館に寄託中の《天華岩》に、「山寺風景」は現在将棋むら天童タワー所蔵の《立谷川 対面石》もしくは《山寺全景》に、「面白山瀑布」は《藤花滝》に、「最上川風景」は丸山長谷川家所蔵の風景画、もしくはこのたび新たに発見された本合海を描いた風景画に相当すると考えられるが、出品作の同定は新発見の作品を含めなお詳細に検討する必要がある。

なお、源吉は上記のほかにも山寺周辺の風景を題材にした作品を出品する予定だったようである。同じ『山形日々新聞』は「氏〔源吉〕は尚石橋その他佳品を出品さるゝはずなりしも開会期日の切迫したるを以て出品し得ざるは遺憾なりしと語られたり」<sup>注41</sup>と報じているが、これに相当する作品は現在見つかっていない。「石橋」（しゃつきょう）は立石寺東方、奥山寺にある巨大な天然石橋であり、『山寺名勝案内』では「夫婦瀑布」の上に「天然石橋」として写真が掲載されている（図3-74）。現在は「夫婦瀑布」（姉滝・妹滝）共々宮城県に属しているが、かつての山寺の寺領であり、当時は「奥山寺」として認識され、『山寺名勝志』や『山寺名勝案内』にも山寺の三大奇景としての記述がある。石橋にたどり着くには難所を越えねばならず、源吉は現地には行かず写真のみを見て制作していたかもしれない。姉滝・妹滝は二口溪谷の奥にあり、これも写真のみに頼った制作だった可能性がある。

源吉以外の作品については高橋由一の「織田信長の密勅拝読」および「如意輪堂の楠正行（小楠公）」を主題とした作品や、またワーグマンの東禅寺における浪士討ち入りの作品を模写した作品、さらに由一の「門下生某の筆に成れる由一氏の肖像」<sup>注42</sup>、及び三島通庸委嘱になる新道関連の作品、「欧州有名の画家の遺品」<sup>注43</sup>や「参考とすべき書類、画本等も少なからず」<sup>注44</sup>展示されたことがわかる。同展の出品作は源吉の山



図3-74 山寺名勝案内（1910年）掲載写真

寺関連作品を除くと、由一生前の1893年（明治26年）前に開かれた「洋画沿革展覧会」（以下「沿革展」という）と共通性が見られる。

「織田信長」および「小楠公」作品に関する報道では、由一が両作品を「病軀を押して揮毫したる」<sup>注45</sup>ことが強調されており、各紙に対して源吉本人もしくは伊澤村長から同様の広報がなされたことがわかる。同時に、「油絵大家の絶筆」<sup>注46</sup>という見出しからも、「沿革展」の趣旨や報道との共通性が看取できる。ただしこれらの作品が油彩であったのか、或いは「沿革展」に出品されたような水彩の下絵・画稿的なものであったのかは記事からは判然としない。この両作品は「東禅寺」関連の作品と同様に、異本の存在が考えられ、現在松原家所蔵の源吉の油彩《楠正行如意輪堂に和歌を題するの図》（1902年）が由一作として出品された可能性もある。

山寺展における由一の「門下生某の筆になれる由一氏の肖像」が「沿革展」出品の原田直次郎の油彩画、現在東京藝術大学所蔵の《高橋由一像》（1893年）と同一作品かどうかは判然としないが可能性はある。

東禅寺関連の作品に関しては最初1911年（明治44）10月19日『山形日々新聞』および『山形新報』紙上でどういうわけか「由一の師（伊太利人）なる人親しく実境を目撃して写されたりと云ふ上野彰技隊奮戦の光景」<sup>注47</sup>と同じ間違いが報じられ、同年10月20日の『山形新聞』に「アレは高輪東禅寺焼き討ちの光景で、当時日本に來た油絵氏某〔ワグマンであろう〕が東禅寺の床下に隠れて居て、その実景を模写したものを更に故高橋由一氏が模写したもの」<sup>注48</sup>という訂正がみられる。「伊太利人」とはフォンタネージを指すのであろうが、おそらくワグマンと混同されたのであろう。源吉自身が間違うとは考えられないので、これらの報道は新聞記者に対する広報に源吉以外、おそらく伊澤栄次村長が関わっていたことを示唆するものである。由一の模写本は現在所在不明であり、山寺展にそれが出品されたかは不明である。源吉には同構図の油彩《高輪東禅寺英国公使館へ浪士乱入之図》（1901年頃、東京国立博物館蔵）と『風俗画報』22号（1890年）に掲載の同題名の石版画がある。「東禅寺」作品には由一や源吉による同構図の様々な異本がある可能性があり<sup>注49</sup>、山寺展出品作は源吉の作品だったとも考えられる。

三島通庸委嘱の新道関連の作品に関しては『山形新聞』が「故三島通庸氏が本県令たりし時代に各地に大土木を起したる実境を模写せしめたるものも数十幅」<sup>注50</sup>と報道しており、また「当時の常盤橋そのまゝを模写したものが現れた、ソレは油絵を以て有名な故高橋由一翁が三島県令の依嘱で自ら模写したもので、略図ながらも当時の面影を偲ぶべきものだ」<sup>注51</sup>とも伝えている。仮にこれが「三島県令道路改修記念画帖」の一部もしくは異本であったとすると、作品数の数え方にもよるが、「三島県令道路改修記念画帖」（山形大学附属博物館蔵）のうち山形県分55図の石版画を中心とした展示ではなかったかと推察される。根本中堂にこれらがどのように展示されたのか不明だが、会場の特性を考えると、画帖そのものが置かれた可能性や、現在個人蔵の《東北新道石版画屏風》（1885年）のような屏風仕立ての展観であった可能性も考えられる<sup>注52</sup>。

ほかに「某欧州有名画家の遺品」や「参考とすべき書類、画本等も少なからず」展示されたことから、同展の出品作は源吉の山寺関連作品を除くと「沿革展」と少なからぬ共通性が見られる。

### （3）山寺展の背景—山寺振興策の一環として

山寺展の背景には、1908年（明治41）の東宮行啓後、近世までにおける宗教的な霊場や二口街道の交通上の要衝から、近代的な観光地に変化しつつあった山寺地域の状況があった。山寺展は山寺地域にとっては地域振興の一環であり、源吉が「今回東村山郡山寺村有志の希望に因り同地の寄勝を揮毫した」<sup>注53</sup>という当時の新聞報道は同展の地域振興としての性格を物語るものである。

明治初期までの山寺の諸部落は二口街道の物流が経済的な拠り所であったが、1976年（昭和51）に山形県令に三島通庸が着任、三島が開削した関山新道、栗子トンネルが開通すると、それまで山形から仙台、太平洋岸への主要な道路であった山寺から二口峠を通過する物流は激減し、経済的な苦境に陥っている。しかしながら、山寺村、東村山郡、山形県をあげての誓願が容れられ、1908年（明治41）の東宮東北巡啓に際しての山寺行啓が実現すると、各地の新聞は山寺を「耶馬溪以上の絶景」と報道し、その名は全国に知れ渡る。行啓招聘の中心人物であった伊澤栄次の言葉を借りれば、行啓後には「火が消えたような山寺が復活し」<sup>注54</sup>、観光地として全国に知れ渡った。行啓後、東村山郡では毎年行啓記念会を開き、またこれを機に1914年（大正3）から毎年「自治展覧会」が郡制終了の1922年（大正11）まで14回開催されている。この自治展覧会の詳しい内容は明らかでないが、会場は源吉の山寺展と同じ山寺根本中堂であることから、1911年（明治44）の山寺展の影響も示唆される。

山寺展の世話人であり、また行啓招聘に尽力した伊澤栄次（1872—1965年）は慈覚大師の研究家として知

られ、号は不忍、当時立石寺貫主であった壬生芳田とは兄弟であり、東宮行啓当時は山寺尋常小学校校長、山寺展開催時は山寺村長であった。1908年（明治41）12月には保硯会の会長を馬淵県知事より委嘱されている。

山寺展は以上のような、行啓後活況を呈した山寺の状況と、1911年（明治44）の山形の大火後に困窮した源吉の事情があいまって開催されたものと考えられる。先述のように源吉は1911年（明治44）春から山形に居住していたが、同年5月の山形大火に遭遇して困窮し、仙台へ行くための資金を得るために展覧会を開催したと伊澤家には伝えられている<sup>註55</sup>。一方で行啓後賑わいを取り戻した山寺も大火によって参拝客が一時的に減少したと新聞は伝えており<sup>註56</sup>、伊澤を中心とした山寺側としても、何らかの追加的な振興策を打つ必要性に迫られていたと考えられる。

伊澤が展覧会の主催者であったことは、《とら》の所蔵先が元は山寺小学校の分校であった荒谷小学校であることから推定される<sup>註57</sup>。《とら》が荒谷小学校に収蔵されるにあたっては同校と関係の深い伊澤の関与があったに違いない。

ちなみに伊澤は山寺振興のため源吉以外にも画家を世話したようで、1905年（明治38）には鳥瞰図画家の松井天山（1869～1947）が山寺に滞在したことが伊澤の日記に見て取れる。松井天山は1906年（明治39）頃から大正期まで仙台に居住し、1915年（大正4）には《新庄線瀬見温泉鳥瞰図》を制作しているが、松井による山寺の鳥瞰図は現在確認されていない<sup>註58</sup>。

#### （4）山寺の風景写真と源吉の山寺風景画―「保硯会」制作の写真との関係

山寺展開催にあたって伊澤栄次の強い影響力があったことは、源吉の作品自体からも読み取れる。各作品の概要で述べたように、源吉の描いた山寺関連の風景画はほぼすべて写真を参照して制作したと考えられる。その写真の多くは山寺振興を目的とした保硯会が発行した書籍の挿図や絵葉書にあるものであり、伊澤栄次の指示のもと、山形市の照井写真館の当時の当主、照井正太郎によって撮影されたものである<sup>註59</sup>。照井写真館は山寺と関係が深く、高橋由一を世話した照井泰四郎（1855～1900）は立石寺六十六世貫主、壬生優田の甥であり、ちなみに由一は優田の肖像を照井泰四郎撮影の写真をもとに制作している。また伊澤は山形師範学校在学時には照井家に下宿していた。正太郎は泰四郎の長男である。

伊澤栄次は保硯会から山寺紹介の書として1908年（明治41）に『山寺名勝志』を、1910年（明治43）に『山寺名勝案内』を刊行している。『山寺名勝志』の初版には31点の、『山寺名勝案内』には15点の山寺の風景や文化遺産の写真が掲載されている。

『山寺名勝志』は行啓に併せて東宮に献上することを目的としたものである。『山寺名勝案内』はその普及版として、より簡易な観光案内として発行されており、173×84ミリという携帯に便利な小冊子で、漢字にはルビもふられ、依然として漢文読み下し調ではあるが『山寺名勝志』より格段に読みやすくなっている。写真7頁、本文74頁である。緒言で伊澤栄次は「東宮殿下 東北御巡啓の御途次山寺に行啓遊ばされる時献上の目的と奉迎記念のため山寺名勝志を公にしたることありしが今回本書に抛り更に通俗的に其要点のみを摘記せるもの即ちこの書なり」と刊行目的を述べている。同書の刊行には行啓後の1909年（明治42）に山寺を訪れた文学者大町桂月の進言があったようだ<sup>註60</sup>。

先述のように『山寺名勝案内』には立石寺周辺の名勝に加え石橋（しゃつきょう）や夫婦瀑布（夫婦滝）など奥山寺の名勝写真が掲載されているが、この背景には立石寺周辺だけでは不十分で、旧寺領の奥山寺（現宮城県）までをも含めた山寺の観光資源化を進めたいという伊澤ほか山寺関係者の意向があったようである。行啓後には郡参事・千布村村長の今野有石を中心に奥山寺の瀑道整備が進められている<sup>註61</sup>。大町桂月は伊澤の案内で面白山瀑布や七滝、石橋など奥山寺の名勝を訪れており、また『山寺名勝志』に序を寄せている中田豪晴は明治期に新聞論説で活躍した人物であったが、この時期は東北にあって、仙山鉄道や観瀑道路（観光トレッキング道路）について意見を述べていた<sup>註62</sup>。

『山寺名勝案内』の掲載写真と源吉の山寺風景との親近性が高いのは、同書の刊行と源吉の来形の時期が近く、原版による同構図のより大きな写真や絵葉書を入手・参照しやすかったことが直接の原因であろう。しかしながら、より根本的には、伊澤ほか関係者の想定する、奥山寺を含めた山寺の代表的名勝を絵画化することが源吉に課せられた要求だったからであろう。源吉が天華岩や対面石、山寺全景に加え、「夫婦瀑布」や「石橋」（現在行方不明）など奥山寺風景を描いているのはこのためであると考えられる。

源吉は制作にあたって『山寺名勝案内』など保硯会関連の刊行物の写真か、その原板から制作された写真を参考にしたと考えられる。このことは、源吉の山寺移住が1911年（明治44）9月初頭で<sup>註63</sup>山寺展まで1ヶ月半と短期間であること、1911年の来形時に源吉は53歳で、難路をたどって《天華岩》などの写景点に至

るのは困難と考えられること、また来形以前から源吉がしばしば写真を参考に制作していたことから推定できる。ただし山寺関連の風景画には現地取材がなければ描けないと考えられる点もあり、源吉自身による現地取材や伊澤を中心とした地域の人々の教導によって風景画が制作されたと考えられる。

例えば《立谷川 対面石》は同構図の写真がなく、対面石や、遠景の「たて山」と呼ばれる一本の木のシルエットのみえる山(図3-75)は『山寺名勝案内』掲載写真の「宝珠山 対面石」(図3-59)が比較的近いものの、対面石と遠景の風景はそれぞれ異なる視点によるものが合成されている。

《山寺全景》は立谷川河畔から根本中堂方面を眺めた景色であるが、画面下方の近景に立谷川が楓川と立石川に分かれる田楽淵の河原の様子が描かれており、それは写真からだけでは判然としない。橋脚や川原の形体からやはり『山寺名勝案内』掲載写真の「宝珠山 立石寺及高橋」(図3-57)が参照されていると思われるが、近景の川が二手に分かれる田楽淵の臨場感は現地取材によるものであろう。また画面左手遠景には「滝不動」の神木と大森山の端も描かれており(図3-76)、描くべき要点の教示があったことが推察される。

《天華岩》と完全に一致する構図の写真は1911年(明治44)以前の写真には見つかっていない。《天華岩》の画面左側の岩の描写は、大小の松や岩穴、きれつの描写から菊地清著『山形名所案内』(菊地写真館、1898年)や『山形名勝記』(菊地清著、清水清吉発行、1901年)掲載の「天狗岩」の写真に非常に近い(図3-77)。菊地清は菊地新学の孫、菊地東陽の兄で風景写真をよくしたと伝えられている<sup>註64</sup>。『山寺名勝志』初版掲載の写真「(第八) 宝珠山天華岩」(図3-78)も比較的近いが、天華岩のより上部にトリミングされている。いずれの写真も水平もしくはやや見下ろす角度で天華岩を撮影しており、天華岩脇の岩から撮影されたものであろう。

《天華岩》に見られる、天華岩と馬形・二口街道方面の眺望の組み合わせは、鑑賞者を登頂による眺望へと誘うねらいがあると考えられる。現在は立ち入り禁止となっているが、昭和期まで天華岩は登頂可能であり、開山堂付近からの登山瀑道も存在していた。実際、天華岩とほぼ同構図の昭和戦前期と思われる観光写真が存在する(図3-79)<sup>註65</sup>。ロープを伝って登山する和服の女性、紀行文でも有名な文学者吉田絃二郎の解説が付随し、観光客を登山へ誘う構成となっている。源吉の作品は明治期の写真の視覚・技術では困難であった天華岩登山への誘いを視覚化しているのであろう。伊澤は天華岩(天花岩)への新道(登山瀑道)開鑿を構想していたようであり<sup>註66</sup>、伊澤にとって天華岩登山は瀑道整備による奥山寺名勝散策と共に山寺の観光資源化の要点だった。志賀重昂『日本風景論』(1894年)が登山奨励の書でもあったように、源吉の作画の背景となった保硯会の『山寺名勝志』や『山寺名勝案内』もまた観光登山奨励の書として読むことができよう。

先述のように、源吉が参照したと思われる天華岩の写真の構図は伊澤栄次の意向を強く反映していると考えられる。『山形名所案内』や『山形名勝記』における、また保硯会関連の「天華岩」の写真は、先述のように天華岩の脇の岩から撮影しているが、この角度からの天華岩の姿は、伊澤栄次の住居のあった下山寺の



図3-75 立谷川 対面石  
たて山と芦沢峠の位置を矢印で示した。



図3-76 山寺全景  
大森山および滝不動御神木を矢印で示した。



図3-77 山形名勝記に  
載された天華岩の写真



図3-78 山寺名勝志に掲載  
された天華岩の写真

芦沢地区から眺めた天華岩の姿に近い(図3-80)。それは今日の観光写真の撮影方向として一般的な、山寺駅や宝珠橋(高橋)方向からみた垂直性の強い天華岩の姿とは大きく異なっている(図3-81)<sup>注67</sup>。保込会関連の天華岩の写真は伊澤邸からみた天華岩の姿に近く、伊澤栄次にとってはそれが天華岩の自然な姿だったのであろう。

芦沢方面からみた天華岩の写真は円仁が芦沢峠を越えてからみた天華岩の光景が意識されたアングルであった可能性もある。立石寺を開山した慈覚大師円仁は秋保から清水峠を経て山形市高瀬地区の風立寺に至り、そこから芦沢峠を越え芦沢川(旧芦沢村)に至り、地藏畑といわれる地区から天華岩を眺望したとされている<sup>注68</sup>。伊澤栄次は慈覚大師円仁の研究家であり、天華岩の写真撮影の視点を照井正太郎に指示するにあたって円仁の山寺入場を意識したことは充分考えられる。

芦沢方向からの天華岩を画面左に、二口峠方向の眺望を画面右に配した源吉の《天華岩》の構成は伊澤栄次の意向を反映していると考えられる。実際には天華岩と二口峠方向の眺望は画面に描かれたような姿では同時には視野に入らないからである。芦沢方向からの天華岩と、山寺地域との歴史的・経済的関わりの深い二口峠を同時に収めた《天華岩》の構成は、伊澤栄次の教導による山寺地域のアイデンティティの表現であったといえる。

同じことは《立谷川 対面石》や《山寺全景》にもいえることができる。《立谷川 対面石》の画面右に描かれた対面石の左手、遠景には芦沢峠方面の光景が描かれており、「たて山」の右手が芦沢峠の方角にあたる(図3-75)。これは円仁が芦沢峠を越えて山寺に入り、対面石で磐司磐三郎と対面したという伝承を想起させる。同作品の複数の視点も伊澤の教導を示唆するものである。田楽淵付近からの眺望である《山寺全景》も、芦沢、南院から中島を経て、すなわち立石川と紅葉川を越えて千住院に至ったという円仁の山寺入場の行程を想起させる<sup>注69</sup>。勿論、遠近感を強調した構図が洋画の構図に適したということはいふまでもない。

#### (5) まとめにかえて一由一の業績との共通性と差異

源吉の来形前後の行動をみると、由一の来形前後の行動との共通性が感じられる。両者の来形前後の業績を比較すると、画塾(団体)の解散、行幸・行啓との関わり、来形と風景画の制作という点で両者には明らかに平行性がある。簡単にいえば、源吉は東北における由一の経験を反復しているようにみえる。先述のように、山寺展自体が啓蒙的な「洋画沿革展覧会」の反復という側面がある。

源吉は由一の壮年期から晩年期にかけて助手として、また明治10年代後半からは《三島県令道路改修記念画帖》や《西周像》などにみるように共同制作者として画業を共にしており、由一没後は『高橋由一履歴』を編集出版するなどして由一の業績を世に問うている。また源吉は石巻で没するまで由一の資料を携行しており、由一の業績は由一没後の源吉の画業における拠り所、参照すべき手本であった。東京での足場を失った源吉が、しばしば東北に出張し業績を残した由一の行動を参考にすることは充分考えられる。

由一の新道画が行幸を契機に見出された近代山形における新名所の記録画であり、近代の歴史画であったとすれば、源吉の風景画もまた行啓を契機に再発見された近代山寺の記録画であり、歴史画であったといえるであろう。近代における行幸・行啓が地域の人々に「風景」を視覚の対象にするとともに、明治以前の地域の伝統を再発見させたことが指摘されている<sup>注70</sup>。由一の新道風景画と源吉の山寺関連の風景画は地域の風



図3-79 天華岩の観光写真(絵葉書)



図3-80 芦沢地区から眺めた天華岩  
(2013年撮影)



図3-81 宝珠橋から見た天華岩  
(2013年撮影)

景の視覚化という点で共通するが、地域における伝統の再生という点で源吉の風景画はより地域のアイデンティティ形成に即したものである。由一の新道風景画は由一の進言によるものとはいえ、三島通庸の委嘱による、三島の開発した新道の記録、換言すれば「上からの」要請による記録画であった。これに対して源吉の山寺関連の風景画は東宮巡啓によって再発見された地域の名勝を伊澤栄次を中心とした山寺地域の人々からの、いうならば「下からの」要請によって写景したものであった。由一と源吉の表現の相違は、明治初期の国家や行政による上からのナショナリズムと、明治中期以降における国民側からの、郷土意識を孕んだナショナリズムとの相違であろう。源吉の山寺関連の風景画は山寺地域の人々、就中伊澤栄次の「烈々たる郷土愛」<sup>注71</sup>を孕んだ眼差しに即したものであった。それは加藤典洋の区分に従うならば、「旅行者的審美の態度による探勝の風景」と「定住者の審美の態度による生活的風景」の狭間に位置するものといえよう<sup>注72</sup>。源吉の風景画は近代以前の名所絵図ではなく、写実的な近代的視覚に基づいている。とはいえそれは印象派的な匿名的かつ純粹視覚的な風景ではなく、対面石や天華岩、二口峠など山寺の歴史を物語る題材をモチーフとしたナラティブな表現であった。

しかし、油絵という媒体の見慣れなさとも相まって、当時において源吉の作品が有した意味を理解できた者はそれほど多くなかったのかもしれない。源吉の山寺関連の作品が伊澤家をはじめ山寺や天童地域に留まっていたのは、山寺展でさほど作品が売れなかったことを暗に示しているように思われる。

#### 4. 今後の展望

今後の課題としては、制作経緯の不明な作品について明らかにしていくことはもとより、1902年(明治35)の源吉の来形および1911年(明治44)までの、また山寺展以後石巻で没するまでの行動について明らかにすることがあげられる。また源吉の作画技法・材料と技法書や同時代の他の作家による表現を比較考察し、源吉の洋画技法の特色についてより詳細な分析を行うことも必要である。これらの調査研究を通じて、山形における源吉の業績について明らかにするとともに、明治期における洋画表現の一端と地域におけるその受容の実態について明らかにしていきたい。

---

#### 注

注1) 歌田眞介編『高橋由一油画の研究—明治前期油画基礎資料集成』中央公論美術出版、1994年。

注2) 彰技堂での本多錦吉郎の訳述講義を、1883年(明治16)に坂広が筆記したものの一冊。原本は“The Art of Landscape Painting in Oil Colours” in “Winsor and Newton's series of HAND-BOOKS ON ART.” Vol.III (1856) で、国沢新九郎の将来本であるといわれている。

注3) 油絵具の透明性を生かして、不透明な下塗りの上に透明な上塗りを施すことで、明暗や質感、空間を表現する方法。高橋由一の作品では、1877年(明治10)以降の作品にグレージング技法が見られる。

注4) 『寒河江市史編纂委員会寒河江市史編纂叢書第32集』、寒河江市教育委員会、1985年、p.35。

注5) 「絵画は眠る 高橋源吉と山形④銀行」『朝日新聞』山形版、2000年10月28日、30面。

注6) 「絵画は眠る 高橋源吉と山形①記憶」『朝日新聞』山形版、2000年10月25日、26面。

注7) 1892年(明治25)作、宮内庁三の丸尚蔵館所蔵。1892年の春、病床の由一は献上画である《楠正行如意輪堂に歌を題するの図》と《織田信長ひそかに密勅を五老臣に示すの図》を制作している。

注8) 1892年(明治25)頃作、東京国立博物館所蔵。

注9) 注6文献。奥平家は幕末の山形城代であった水野家の家臣の家系で、山形地域でいう「御徒衆(おかちしゅう)」であり、その多くは幕末後には教員や銀行員などになっている。

注10) 伊澤友明氏談。

注11) 面白山から流れる楓(もみじ)川と、二口峠から流れる立石川が立谷川へ合流する地点。田楽法師が禊をおこなったところと言われ、この地域は中島地区といわれている。

注12) 高橋は現在の宝珠橋。立谷川洪水のため落橋し、1910年(明治43)に新しく架橋された際に技師の意見を取り入れ、欄干を白く塗られた。『山寺名勝案内』は、その4ヵ月後脱稿されている。

注13) 伊澤不忍原著『続山寺百話』伊澤貞一、1997年、p.92。

注14) 注13に同じ。

注15) 伊澤不忍『山寺百話』伊澤貞一、1991年、p.160。

注16) 伊澤栄次『山寺名勝志完』保硯会、1908年、pp.78—79。

注17) 「山寺油絵展覧会 参考品頗る多し」『山形日々新聞』1911年10月19日、3面。

注18) 「絵画は眠る 高橋源吉と山形③山寺」『朝日新聞』山形版、2000年10月27日、31面。

- 注19) 戸田家での聞き取りによる。
- 注20) 1899年（明治32）創業の大石田銀行は、昭和2年に尾花沢商業銀行と合併し、村山銀行になった。その後、両羽銀行（現山形銀行）に吸収合併された。
- 注21) 注5文献。
- 注22) 安倍季雄『偉人のあしあと』以文會、1951、pp.49－63。
- 注23) 『山形名勝記』は山形県内の名勝を写真と文章で紹介したもので、著者の菊地清は菊地新学の孫で菊地東陽の兄である。同書の写真は序文によれば「清水」と「阿部」の手になるものであるようだが、おそらく風景写真をよくした菊地清の写真も含まれているとみられる。清水は同書の発行者で巻末広告にある山形市勸工場内「福島屋清吉」の清水清吉、阿部は巻末広告にある山形市勸工場内「岩松屋」であろう。同書は1901年（明治34）の山形市における奥羽六県北海道連合物産共進会開催にあわせて出版されたとみられる。ちなみに菊地清は1897（明治30）年に菊地写真館から同様な写真入りの名所案内誌『山形県名所案内』を発行している。
- 注24) 注5文献。
- 注25) 同上。
- 注26) 同上。
- 注27) ちなみに（臥龍橋）との関連でいえば、同橋のある白岩に水力発電所が建設され、山形電気が開業したのは1900年（明治33）6月1日であり、これに先立つ5月の試験点灯で山形、長崎（現中山町）、寒河江、白岩地区はお祭り騒ぎであったという。以下を参照。近藤侃一『六十里越』山形文学会、1969年、p.95。
- 注28) 吉田吉助著、後藤嘉一編『山形桐紙と吉田家』吉田桐紙工業所、1968年、p.219。
- 注29) 「久しく同市に居住して彩豪を揮（ふる）っていた油絵専門の高橋源吉翁は兩三日前に奥羽の耶馬溪たる山寺に居を移し〔後略〕」（「見聞雑記」『山形新聞』1911年9月5日、2面）。「故高橋由一氏の令息高橋源吉は春來当市に來遊し〔後略〕」（「山寺油絵展覧會」『山形日々新聞』同年10月12日、2面）。
- 注30) 『宝珠のしずく』第8号、山寺公民館、2004年2月29日、p.84。記事中明治42年とあるのは44年の誤り。
- 注31) 注17文献。
- 注32) 今回の調査で発見された《本合海》新庄市の本合海付近から最上川と日山を描いたもので、源吉が新聞記者に語った通りの行程をたどった可能性が示唆される。ただし、この作品が山寺展出品作であることを考慮し、なお検討せねばなるまい。《大石田風景（仮題）》もこの旅程の途中で描かれた可能性がある。
- 注33) 当初10日間の予定（「油絵大家の絶筆」『山形新聞』1911年10月18日）が5日間延長された。伊澤栄次の日記である『不忍日記抄 天1911年』11月5日の項に「油絵展覧會本日終了。高橋由（長男）高橋源吉の山寺風景画も」とある。
- 注34) 喜多六「山寺に遊ぶの記（一）」『山形新聞』1911年10月20日、3面。
- 注35) 「山寺の油絵展覧會▲根本中堂の盛観」『山形新報』、1911年10月19日、2面。
- 注36) 「山寺だより」『山形新聞』1911年10月19日、3面。
- 注37) 注35文献。
- 注38) 「油絵大家の絶筆」『山形新聞』1911年10月18日、2面。
- 注39) 注17文献。
- 注40) 同上。
- 注41) 同上。
- 注42) 同上および注35文献。
- 注43) 注34文献。
- 注44) 注38文献。
- 注45) 「山寺油絵展覧會」『山形日々新聞』1911年10月12日2面、および注38文献。
- 注46) 注38文献。
- 注47) 注17文献、および注35文献。
- 注48) 「見聞雑記」『山形新聞』1911年10月20日、2面。
- 注49) 以下を参照。古田亮「ワグマン、由一、源吉の描いた東禅寺事件図について」「没後100年 高橋由一展 近代洋画の黎明」展図録、神奈川県立近代美術館、香川県文化会館、三重県立美術館、福島県立美術館、朝日新聞社、1994年。
- 注50) 注38文献。
- 注51) 「見聞雑記」『山形新聞』1911年10月18日、2面。
- 注52) 《東北新道石版画屏風》（1885年）に関しては「近代洋画の開拓者 高橋由一」展図録（読売新聞社、NHK、NHKプロモーション、2012年）pp.206－207に図版と岡部信幸の解説がある。
- 注53) 「山寺油絵展覧會」『山形日々新聞』1911年10月12日、2面。
- 注54) 伊澤栄次『山寺行啓記』1966年、p.14。
- 注55) 注30文献。
- 注56) 注36文献「山寺は東村山郡の山寺にあらずして山形市の山寺なることが適切に照明せられたりそは山形市の大火後は一向に参詣者なく故老も何十年來曾て見ざる所なると言ひ居りたれるが山形市の復旧と共に近頃は追々と遊覽者を増加したり」。
- 注57) 現在荒谷小学校は天童市に所属しているが、同校は山寺学校荒谷分教場として1880年（明治13）に創立し、1889年（明治22）に荒谷村と山寺村が1892年（明治25）に合併後、同校は山寺小学校荒谷分校となり、1913年（大正2）4月に山寺小学

校荒谷分教場となる。伊澤栄次は1898年（明治31）10月より1911年（明治44）1月まで山寺小学校（山寺尋常高等小学校）校長の職にあり、その後山寺村長、東村山郡書記を歴任後、1922年（大正11）に山寺小学校校長に復している。

注58) 松井天山については下記を参照。中西遼太郎「昭和初期の千葉市街を描いた鳥瞰図」『近代日本の視覚的経験 絵地図と写真の世界』ナカニシヤ出版、2008年、p.105。

注59) 『山寺名勝案内』の出版元である保应会（ほりゅうかい）は、山寺石の採掘から山寺の景観を保護し、また山寺を振興するために伊澤栄次、今野有石らによって創設されたものである。県をまじえた正式な発会は行啓後の1908年（明治41）11月だが、行啓時に東宮に献上するため、『山寺名勝志』など山寺紹介のための書籍や観光絵葉書を先行して発行している。さらに保应会からは『山寺名勝志』や『山寺名勝案内』に先行する山寺紹介の書として、仙台の漢学者岡千仞による『山寺攬勝志』（明治34年）が同会から発行されている。岡は三島県令道路改修記念画帖の跋文を書いた人物である。保应会関係の出版物の印刷元は東京市神田区新石町三番地の東陽堂であり、同社の創業者は米沢出身の吾妻健三郎（安政3年—明治11年）、同社は我が国銅版印刷業の草分けである。同社は1888年（明治21）に美術専門誌『絵画叢誌』を、1889年（明治22）には本邦グラフ雑誌の先駆けともいうべき『風俗画報』を創刊しており、奇しくも同誌には源吉も作品を掲載している。『山寺名勝志』には『風俗画報』編集長であった山下重民も序を寄せている。伊澤栄次の日記には、『山寺名勝志』編纂にあたって照井正（正太郎）に写真を撮らせたこと、また、神田駿河台の吾妻健三郎方で校正に従事したことが記されている。

注60) 伊澤栄次『不忍日記抄』 1909年7月21日。大町桂月は7月19日二口峠を経て山寺に入り、伊澤は20日には中田豪晴と共に小宴を開いている。

注61) 注13文献、p.80。

注62) 注60文献、1908年10月17日。

注63) 「見聞雑記」『山形新聞』1911年9月5日、2面

注64) 『菊地東陽伝』菊地東陽先生傳記編纂会、1941年、pp.155-160。

注65) 小林和彦氏（山形歴史たてもの研究会）よりご提供いただいた。

注66) 伊澤栄次「不忍自序」注13文献、p.1。

注67) 山寺の新関孝夫氏のご教示による。

注68) 二口峠は立石寺開山後の開通である。

注69) 『山寺名勝志』（1908年）における写真31葉のうち、冒頭は「（第一）中島ヨリ宝珠山ヲ望ム」（図3-82）であり、次頁は田楽淵付近からの「（第二）宝珠山立石寺」（図3-83）である。1908年（明治41）の行啓直前において宝珠山立石寺の全景は中島、田楽淵方向から望むべきものという伊澤栄次の認識があったのかもしれない、この視点は1910年（明治43）の『山寺名勝案内』でも踏襲されている。

1879—1880年（明治12—13）頃、学校に山王橋（神橋）から立谷川を越えて通ったという伊澤の回想記が『続山寺百話』にある（前掲、p.155）。当時山寺学校（後の山寺小学校）は根本中堂隣の村社、日枝神社（山王社）拝殿内にあり、山王橋は1902年（明治35）に洪水で流されるまで田楽淵に近い日枝神社南方下に架けられていた。芦沢地区に住んだ伊澤にとって、中島・田楽淵方面からの宝珠山・立石寺の姿は馴れ親しんだものであったろう。ちなみに『山寺名勝志』（1925年再版）における写真頁の冒頭は立谷川対岸の高台正面からの眺望である「宝珠山立石寺境内全景」（図3-84）に変わっており、それは現在の「風雅の国」付近からの眺望に近い。1908年（明治41）の行啓でも皇太子は高橋を渡って対岸から立石寺を眺望している。今日ではおおむね対岸正面からの景色が宝珠山立石寺全景の眺望として定着しているようである。

注70) 以下を参照。原武史『可視化された帝国 近代日本の行幸啓』みすず書房、2001年、p.163。

注71) 山形市立山寺小学校『山寺母校の百年 創立百周年記念誌』創立百周年記念事業協賛会、1974年、p.46。

注72) 加藤典洋「武蔵野の消滅」『日本風景論』講談社文芸文庫、2000年。



図3-82 （第一）中島ヨリ宝珠山ヲ望ム



図3-83  
（第二）宝珠山立石寺



図3-84 宝珠山立石寺境内全景

## 謝辞

作品調査にご協力いただきました所蔵者の方々に篤く御礼申し上げます。また、本研究に際しては、伊澤貞一様、新関孝夫様、照井與泰様はじめ、多くの方のご教示を得ました。御礼申し上げます。

#### Ⅳ. 民間信仰に関する文化遺産の研究

## 対象地域に所在する書画

— 調査研究報告と絵馬の応急処置 —

大山龍顕 三上喜孝

表4-1 作品一覧

| 種類  | 指定 | 内容       | 設置場所         | 制作者       | 制作年         | 材質技法 | 本紙寸法 (cm) |       | 全体寸法 (cm) |       |
|-----|----|----------|--------------|-----------|-------------|------|-----------|-------|-----------|-------|
|     |    |          |              |           |             |      | 縦         | 横     | 縦         | 横     |
| 掛軸  |    | 宥舜御影画像   | 高畠町 大聖寺 宝物館  | 不明        | 元禄9年(1696)  | 紙本着色 | 92        | 41.8  | 175.0     | 57.0  |
| 掛軸  |    | 召宥御影画像   | 高畠町 大聖寺 宝物館  | 不明        | 享保9年(1724)  | 紙本着色 | 91.9      | 41.6  | 173.5     | 56.5  |
| 掛軸  |    | 亮奄御影画像   | 高畠町 大聖寺 宝物館  | 不明        | 延享元年(1744)  | 紙本着色 | 94.3      | 40.3  | 170.5     | 55.1  |
| 掛軸  |    | 宥岳御影画像   | 高畠町 大聖寺 宝物館  | 不明        | 宝暦12(1762)  | 紙本着色 | 97.7      | 40.0  | 171.5     | 55.1  |
| 掛軸  |    | 宥整御影画像   | 高畠町 大聖寺 宝物館  | 不明        | 安永年間        | 紙本着色 | 93.2      | 41.0  | 173.5     | 57.2  |
| 掛軸  |    | 宥長御影画像   | 高畠町 大聖寺 宝物館  | 不明        | 安永9年(1780)  | 紙本着色 | 93.4      | 41.0  | 173.3     | 57.0  |
| 掛軸  |    | 宥中御影画像   | 高畠町 大聖寺 宝物館  | 不明        | 寛政3年(1791)  | 紙本着色 | 91.3      | 38.1  | 179.0     | 51.7  |
| 掛軸  |    | 高達御影画像   | 高畠町 大聖寺 宝物館  | 不明        | 寛政4年(1792)  | 紙本着色 | 91.5      | 35.4  | 177.4     | 49.0  |
| 掛軸  |    | 宥京御影画像   | 高畠町 大聖寺 宝物館  | 不明        | 寛政5年(1793)  | 紙本着色 | 93.4      | 42.6  | 169.2     | 58.1  |
| 掛軸  |    | 宥貞御影画像   | 高畠町 大聖寺 宝物館  | 不明        | 文化6年(1809)  | 紙本着色 | 97.2      | 35.5  | 175.5     | 46.1  |
| 掛軸  |    | 胎藏界曼荼羅   | 高畠町 大聖寺 宝物館  | 不明(洛下之画工) | 宝暦13年(1763) | 紙本着色 | 115.8     | 99.2  | 230.0     | 126.0 |
| 掛軸  |    | 胎藏界曼荼羅   | 高畠町 大聖寺 宝物館  | 不明        | 不明          | 紙本着色 | 112.5     | 97.0  | 206.0     | 121.8 |
| 絵馬  |    | 獅子舞図     | 西川町 獅子ヶ口諏訪神社 | 大友素堂      | 蔓延2年(1861)  | 紙本着色 | 46.5      | 32.0  | 49.8      | 35.3  |
| 絵馬  |    | 獅子舞図     | 西川町 獅子ヶ口諏訪神社 | 芝原        | 安政4年(1857)  | 紙本着色 | 45.0      | 66.6  | 49.0      | 70.5  |
| 天井画 |    | 龍図       | 大江町 羽黒神社     | 芝原        | 不明          | 板本着色 | 不明        | 不明    |           |       |
| 天井画 |    | 女図       | 西川町 獅子ヶ口諏訪神社 | 芝原        | 不明          | 板本着色 | 不明        | 不明    |           |       |
| 天井画 |    | 兎と木賊図    | 西川町 向本道寺     | 芝原        | 不明          | 板本着色 | 40.2      | 39.8  |           |       |
| 天井画 |    | 蘭図       | 大江町 羽黒神社     | 大江雋斎      | 不明          | 板本墨画 | 不明        | 不明    |           |       |
| 天井画 |    | 牡丹図      | 西川町 獅子ヶ口諏訪神社 | 服部武陵      | 不明          | 板本着色 | 不明        | 不明    |           |       |
| 天井画 |    | 龍図       | 西川町 獅子ヶ口諏訪神社 | 服部武陵      | 不明          | 板本墨画 | 不明        | 不明    |           |       |
| 天井画 |    | 龍図       | 西川町 愛染院 位牌堂  | 佐藤北洲      | 不明          | 板本着色 | 61.0      | 61.0  |           |       |
| 天井画 |    | 鶏図       | 西川町 愛染院 位牌堂  | 佐藤北洲      | 不明          | 板本着色 | 61.0      | 61.0  |           |       |
| 天井画 |    | 鷹図       | 西川町 愛染院 位牌堂  | 菊池雲岳      | 不明          | 板本着色 | 61.0      | 61.0  |           |       |
| 天井画 |    | 獅子舞図     | 西川町 獅子ヶ口諏訪神社 | 太嶺        | 不明          | 紙本着色 | 不明        | 不明    |           |       |
| 天井画 |    | 鷹図       | 大江町 羽黒神社     | 浅倉旭斎      | 不明          | 板本着色 | 不明        | 不明    |           |       |
| 天井画 |    | 蓮とセキレイ図  | 大江町 羽黒神社     | 浅倉旭斎      | 不明          | 板本着色 | 不明        | 不明    |           |       |
| 天井画 |    | 鷹と梅図     | 大江町 羽黒神社     | 浅倉旭斎      | 不明          | 板本着色 | 不明        | 不明    |           |       |
| 天井画 |    | 菊図       | 西川町 獅子ヶ口諏訪神社 | 浅倉旭斎      | 不明          | 板本着色 | 不明        | 不明    |           |       |
| 天井画 |    | 菊図       | 西川町 愛染院 地藏堂  | 渡邊文貞女     | 嘉永元年(1848)  | 板本着色 | 37.2      | 37.2  |           |       |
| 天井画 |    | 竹図       | 大江町 羽黒神社     | 秀 □       | 不明          | 板本墨画 | 不明        | 不明    |           |       |
| 天井画 |    | 棕櫚図      | 大江町 羽黒神社     | 秀 □       | 不明          | 板本墨画 | 不明        | 不明    |           |       |
| 天井画 |    | 棕櫚図      | 大江町 羽黒神社     | 不明        | 不明          | 板本墨画 | 不明        | 不明    |           |       |
| 絵馬  |    | 安達ヶ原の鬼婆図 | 高畠町 大聖寺 観音堂  | 太田霞岳      | 明治39年(1906) | 板本着色 | 96.5      | 139.5 |           |       |
| 掛軸  |    | 菊児童図     | 個人蔵          | 目賀多守息     | 不明          | 紙本墨画 | 43.8      | 71.2  | 88.0      | 83.2  |
| 絵馬  |    | 唐獅子図     | 高畠町 大聖寺 宝物館  | 目賀多守息     | 貞享4年(1687)  | 板本着色 | 126.0     | 142.0 | 132.0     | 150.5 |
| 絵馬  |    | 福祿寿図     | 寒河江市 慈恩寺     | 最上院 篤斎    | 文政6年(1823)  | 紙本着色 | 168.0     | 96.0  | 177.0     | 105.0 |
| 絵馬  | ○  | 稲荷神社農耕絵馬 | 喜多方市 稲荷神社    | 高橋金年      | 明治40年(1907) | 紙本着色 | 80.8      | 126.0 | 91.0      | 136.0 |

## 1. はじめに

今年度は、これまでの継続調査活動を行い、その成果としては、外部研究員の協力を得ながら調査研究を進めたことで、調査結果が少しずつ具体的になり始めている。

書画作品は、絵画（掛軸・卷子・屏風・襖）や文書（書籍・典籍・古文書）といった様々な分野が対象となる。地域所在の書画作品を地域文化遺産として調査を進めることが困難な背景には、個人所蔵作品が多いこと、作品と地域の関係性を導き出す糸口を見つけ難いことに一因がある。平成22年度より実施してきた本研究事業における調査では、地域の寺社を中心に調査を進めてきたことで、掛軸のみならず、絵馬や天井絵といった様々な作品に共通する作者銘を見出し、地域の絵師や画家の活動実態の解明に繋がり始めている。その中でも、絵馬には年代の記載も多くみられ、各分野の作品を横断的に繋ぎながら作家と時間の変遷を辿る役割を果たしており、個々の作品価値だけでなく、地域の書画活動を読み解く重要な要素となっていた。

本稿では、改めて書画全体の研究目的の位置づけを確認しながら、地域における作品調査について整理し、各分野を繋ぐ絵馬の重要性を見出し、保存の重要性を確認する。また、地域所在の絵馬に見られる多くの損傷に対して応急的な処置を行い、その果たす役割について考察する<sup>1, 2</sup>。

## 2. 対象地域

### 〈西川町〉

旧本道寺（口の宮湯殿山神社）、向本道寺（稲荷神社）、八聖山金山神社、岩根沢三山神社（旧日月寺）、岩根沢宿坊、愛染院、獅子ヶ口諏訪神社

### 〈大江町〉

中の畑雷神社、羽黒神社、巨海院、法界寺

### 〈高島町〉

大聖寺（亀岡文殊）、久昌寺、寒河江慈恩寺



図4-1 対象地域（三町）



図4-2 対象地域（西川町・大江町）

## 3. 調査研究報告

### (1) 巨海院文書調査<sup>2</sup>

大江町の小漆川に所在する巨海院は、近世以降の文化遺産を多数所蔵している地域の古刹である。平成23年度より悉皆調査に取り組んでいるが、本年度は概要の確認を行った巨海院文書調査に、外部研究員（山形大学松尾剛次教授）の協力を得て取り組んだ。

#### ① 実施内容

記録撮影、目録作成、保管状況の改善



図4-3 巨海院文書

## ② 調査進行状況と次年度の展望

今回の研究事業では、悉皆調査の結果をもとに地域の文化遺産を総合的に把握することを目指している。その上で歴史学などの様々な視点から再評価を行うことを目指しており、その第一段階として資料の概要把握を伴った目録作成を進めてきた。これまではセンター研究員のみで行っていたが、外部研究員との協力体制のもとに取り組んでいる。平成24年度の成果として、全ての文書資料について整理番号を付け目録化した。文書点数は596点で、現在164点の概要について内容調査が進んでいる。文書の画像記録についても、冊子資料は全て撮影による記録を行っており、文書写真は291点まで撮影を進めた。内容については、各文書の形状、年代（元号と西暦）、名称、差出人、宛名、寸法を記録し、キーワードとして内容の要点を記載している。

資料の保管方法についても、保管されていた抽斗内には虫の食痕が見られ（図4-4）、文書中に文化財害虫である「シミ」も確認されたため調査と同時に改善を進め、文書の保管形態を変更した（図4-5）。文書の保管方法については所蔵者の同意のもとに行った。中性紙の封筒（図4-7）に文書を一点ずつ収め、中性紙ボードの保存箱（図4-6）に収納した<sup>註1</sup>。今後は全文書の内容調査を進め、基礎資料として活用できるよう目録作成を行う。

調査内容に踏み込んだ成果報告については改めて行うこととしたい。



図4-4 保存箱内の虫害あと



図4-5 文書の保管箱



図4-6 文書整理用封筒

## （2）書画作品の制作時期～高島町大聖寺御影画像と墓石から

### ① 実施内容

大聖寺は、平成22年度に調査を行った高島町の古刹だが、近世以降の仏画作品も多かった。近世以降の仏画作品は美術的な評価の対象になる機会は少なく、資料としての位置づけも難しいが、各作品の年代を特定することは作品の評価を進める上で重要である。今回対象とした住職の御影画像には墨書による年代表記があるため年代ごとに整理することで、他作品の年代判定の基準資料とすることを試みた。

調査内容／墓石調査：高島石による歴代住職の墓石

御影画像調査：平成22年度調査の追加調査として実施

### ② 成果と展望

御影画像の年代に合わせて、表装裂や形式、素材の特徴をみると、①32世～④36世までの表装裂には高野裂と呼ばれる綾織の赤い裂が表装外縁部（総縁）に用いられ、その後、白茶地の無地裂の総縁があり、筋で分ける形式や紙の表具といったやや文人的な雰囲気の様式へと変化している。①32世～④36世の表装の変化では赤色の総縁の内側で画面の周囲に配置された緑地（中廻し）の牡丹文様が次第に小型化していき、緑に赤といった補色を用いる仏画の色彩原則から離れて、同系色の紫の中廻しとなっている（図4-7）。わずかな点数をもって資料とすることは乱暴ではあるものの、改めて年代順に表具を見ると、仏画形式が継承されなくなり、次第に身近な形式へと変遷をする様子が近世の時代の変化と呼応している様子が窺える。

平成22年度の調査時に、数点確認した両界曼荼羅のうち、宝暦13年（1762）の墨書が裏面にある胎藏界曼荼羅（図4-8）と同時期の④36世を比較すると、表具の裂では④36世のように高野裂と呼ばれる綾織で朱色の裂を用いた仏画表具の形式となっており、中廻しも赤に対して緑といった仏画の色彩対比とはやや異なった表具となっている。色彩配置は①32世とも共通するが、文様の大きさの関係性を見ると、やはり④36世の表具と共通している。また、大聖寺ではもう一点制作年不明のほぼ同寸の胎藏界曼荼羅図が確認されていた（図4-9）。図様や紙本である点は図4-8に近かったが、表現はやや異なり年代などは不明であった。この図4-9の曼荼羅を①32世～④36世までの表装と比較してみると、総縁や中廻しは②34世の表具と近いことがわかる。2点の曼荼羅は図様もほぼ変わらないものの、尊像の描写と合わせてみると、図4-8の方が色彩は鮮やかな印象を受ける。御影像と照合しながら改めて年代をみると、図4-8は4-9以前の作品である可能性が高く、18世紀初頭という年代に判断することができそうである。

注意すべき点は、表具は修理の際に新調されることが多いことで、単純にそこから年代をみることは危険なことである。これは、当初の地域に所在するからこそ規準になりえると考えており、地域に所在する近世の仏画は修理されていない作品も多いことが逆説的に幸いしている。実際、この二点の曼荼羅図は表装裂上

部の損傷が著しく、修復された形跡は確認できなかった。また、地域の主要寺院とはいえ、御影像についても礼拝の対象となるものは限られるため修復される機会も多くなかったとみえる。しかし、修復される機会が少なかったことで各年代の変遷を見出せる資料的価値を伝えており、同様に年代表記のある一連の作品を改めて資料として使用することで対象の価値を再評価することに繋がると考えている。

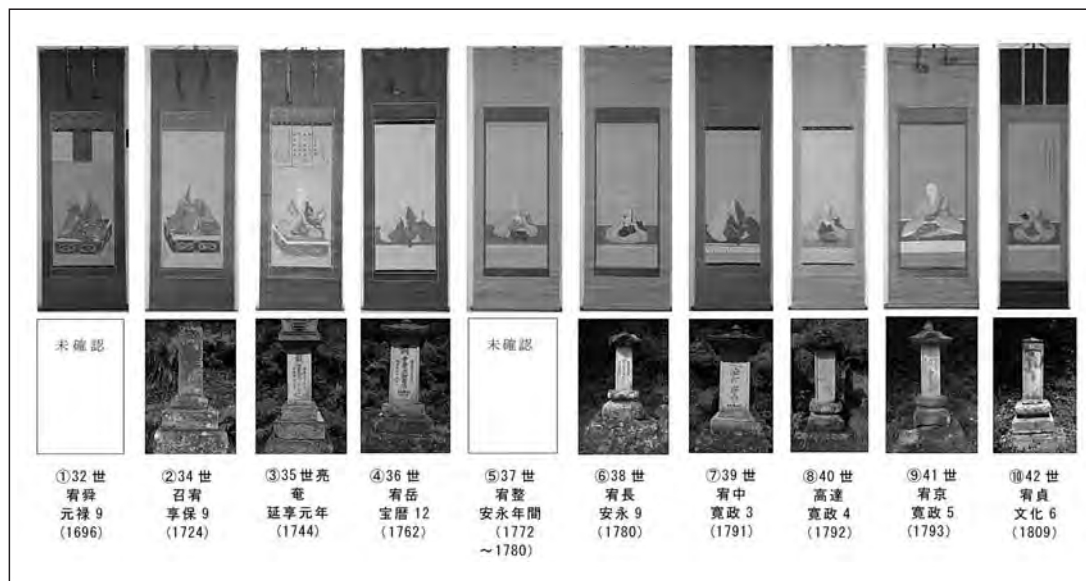


図4-7 大聖寺 御影像と墓石



図4-8 胎蔵界曼荼羅図



図4-9 胎蔵界曼荼羅図



図4-10 図4-8の裏面墨書（部分）

### (3) 天井画調査と地域の絵師の活動

#### ① 実施内容<sup>2</sup>

平成24年度は西川町教育委員会の協力を得て、西川町に所在する天井画を調査する機会を得た。対象地域に所在する書画作品は、これまで調査した書画（掛軸・屏風・絵馬）だけでも、地域内で活躍した画家（絵師）の作品とみられるものが大半であった。書画調査を進める中で、他の絵馬や絵画作品にも共通する名前が散見するため、天井絵の状態調査と併行して、作者についても町史やこれまでの作品と照合して特定を進め、地元絵師の活動について解明を試みている。また、今回調査した羽黒神社以外の天井画については外部研究員の東北芸術工科大学山田烈非常勤講師の協力のもと美術史的な見地からの検証を進めている。

<調査地> 天井画／向本道寺、愛染院位牌堂・地藏堂、金山神社、獅子ヶ口諏訪神社

## ② 天井画について

### 〈愛染院 位牌堂〉

84面の格天井に天井絵が描かれている。位牌堂の出口側には一列を使って、十数羽の鴨が飛来するさまが描かれている。鴨の右端に「大正二癸丑筆 口筆」と銘があり、制作年代が大正2年（1913）であることがわかる。他の天井絵にも「太山」「北洲口 七十五翁」「雲岳」「北洲口翁」「北洲居士」といった銘が記されており、複数人で制作にあたったことが窺える。そのうち「北洲」の銘については、大江町巨海院の障壁画にある紅白牡丹図などを描いた佐藤北洲である。



図4-11 愛染院 位牌堂

所見：江戸時代からの元の図様を参考にして近代になって改作したものか、あるいは何か他のものを参考に自由に描いたものか、不明である。墨主体でわずかな色彩はどぎつく、線描にもあまり注意していない。全体に画風は平板で未熟な面が目立つ<sup>112</sup>。

### 〈愛染院 地藏堂〉

愛染院の境内に立つ地藏堂内にも、天井絵が9面残っている。かつては全面が格天井だったかもしれないが、現在は天井中央部分に九面が残るのみとなっている。8面にそれぞれ銘が記されている。円相内に牡丹を描いているものや、板地の余白を大きくとっているものなど作風はまちまちで、作者銘が記されているが、花鳥画に画題をとっているものの、統一感はありません。現在の天井を設置する際に様々な形で伝わっていた天井絵を集めたとも推測される。



図4-12 愛染院 地藏堂

「文貞女」という銘については、明治26年10月に山形市旅籠町永昌堂で印刷した「山形県村山四郡書画諸先生真名概略」<sup>113</sup>に掲載されている山邊の渡邊文貞女であると考えられる。所見：江戸時代後期のものか。各モチーフを大きめにゆったり描く。朱、ほか色彩の数は少ないが、線描もしっかりしている。画風は平明で上品な感じを受ける。女性画家の参加も見られる。作者は旭斎、文貞「十三歳文貞女筆」、太嶺ほかの名前がある。なお堂中に天保10年（1839）、弘化2年（1845）ほかの奉納額があり参考となる。

### 〈稲荷神社（向本道寺）〉

創立年は不詳だが、氏子荒木太左エ門氏が奉納した鰐口に「寛文丙午六年最上、寒河江保土内村」と銘記されている。現社殿は天保年間に再建されている<sup>3</sup>。



図4-13 稲荷神社（向本道寺）

格天井80面に天井画が描かれており、作者には「五



図4-14 天井画

峯」「口原」という銘が見られ、「緡水堂」という屋号も見られる。

所見：江戸時代後期のものか。各モチーフを小さく素朴淡泊に描き、やや図案化している。なお絵馬が多く、また嘉永元年9月の棟札も参考となる<sup>112</sup>。

「口原」と同様の銘は同町内の獅子ヶ口諏訪神社の絵馬中にも確認されている（図4-23）。絵馬には「安政四年（1857）」の年号が見られることから、江戸末期に地元で活動した画家であると推測する。天井絵についても同一銘があることから制作時期は江戸末期から、明治期とみられる。

### 〈金山神社（八聖山 不動明王）〉

拜殿の格天井77面に天井絵が設置されている。中央部の三面は格子となって天井裏が覗けるようになっており、入口側二面が欠失しているため、画面は72面となっている。作者は「柳菰子直重」という銘と落款があるものの詳細は不明である。近くを川が流れることから、堂内は高湿度の環境となっている。板絵の状態

は良好とはいえず、緑青や辰砂は剥落が進み、湿度の影響からか、画面表面には水シミが表れている。作品の画題や時代背景などには今後詳細な検証が必要となるが、制作時期については現在の本殿が宝暦12年



図4-15 金山神社



図4-16 天井画

(1762) に再建されたということから、天井絵も同時期の可能性がある。

所見：主に湿気による損傷が大きく、図様すら判明しにくいいため、ここでの言及は避けたい<sup>註2</sup>。なお本殿は宝暦12年建立で町指定文化財となっている。

#### 〈獅子ヶ口諏訪神社〉<sup>2, 4</sup>

獅子ヶ口諏訪神社は県内でも有数の絵馬が多く所蔵されている神社として知られている。縁起では元禄15年(1702)寒河江川の川中に建てられたというが、現在の川岸に移動したのは明治16年(1883)の洪水の際



図4-17 諏訪神社本殿



図4-18 諏訪神社本殿内天井画

となっている。その後も道路工事に伴って移動して現在の場所に移っている。本殿内天井画について、制作時期など具体的な報告はされておらず、定かではない。扉の「墨書」については赤外線画像を用いて記録し、外部研究員の山形大学三上善孝准教授の協力を得て解読をすすめている。墨書については後述する。

所見：作品に巧拙ばらつきがあるが、今回調査では最も充実している。作者の落款の中に「辛巳孟冬」とあり、辛巳は宝暦11年(1761)、文政4年(1821)、明治14年(1881)があり、その中の文政があたるか。別の作品落款に「申季春」とあるのは3年後か。そうであれば、天井画全体は文政7年頃かと考えられる。画風は作家数も多く多様だが、特に草花、美人画、獅子などに佳作がみられる。作家は武陵、旭斎、太嶺ほかの名前がある<sup>註2</sup>。

#### 〈羽黒神社〉

御神宝は御神体三体の木造神で鎌倉時代の作と伝えられ、御神体は神社本殿の奥宮に祀られて秘仏となっている。大江氏が黒印により六石四斗の土地を寄進し、後に徳川氏になって朱印に改められた。明治6年(1873)に顔好村の村社になった。



図4-19 羽黒神社



図4-20 天井画

顔好村の羽黒神社薬師堂について宗古録には次のようにある。

「羽黒神顔好に在り、社領神主清野播磨守薬師堂同上仏飼料赤梅檀木弘法大師作旧記に曰く、昔源頼朝公の家臣因幡守大江広元嫡男大江親広は釣命を蒙り相州鎌倉より羽州村山郡に下り領主となる、その時一体の薬師仏を奉持し此の処に安置す。」<sup>3</sup>

#### ③ 天井画調査からみた絵師の活動

獅子ヶ口諏訪神社をはじめ、愛染院、向井本道寺の天井画には作者の銘が記されているものが多数見られた。その中には、絵馬に共通して記されている銘も見られ、近隣地域で活躍した絵師、画家が制作にあたったことが分かる。

各作品の銘をみると、向井本道寺では二名が確認され「五峯」と「□原」となっている。五峯は「五鳳」である可能性があり、横五鳳とみられる。横家は新町村の旧家で累代藤左衛門を名乗る豪商だった。文化12年（1815）7月に生まれる。安政4年（1857）以降、五鳳と号した。緑峯という号で俳諧も読んでいた。河北町の文化人として江戸末期に活躍した人物である<sup>註45</sup>。もう一人についてはまだ特定はできていない。しかし「□原」銘の作品は西川町と大江町の天井画や絵馬に数多く見ることができる。諏訪神社の絵馬3面、天井画2面、大江町羽黒神社の天井画4面にも名が確認されている。そのうち、獅子ヶ口諏訪神社本殿に奉納されている絵馬には「緡水堂」という屋号も記され、向本道寺の天井画にも同様の屋号が確認されるため同一人物とみられる。作品には巧拙の差が見られるものの、現在のところ最も数多くの作品が所在する人物である。にもかかわらず、「□原」という人物は未確認で、特定できていない。その理由には「大、或いは芝<sup>註4</sup>」という1文字目が崩し字で書かれており判読できないことも挙げられ、「太原」であれば、西塔太原という可能性がある。

西塔太原は天保一嘉永元年（1848）の人である。中山町出身で（柳沢、九代目西塔長衛門）、はじめ琴岱といい、江戸に出て谷文晁の弟子であったという。帰郷後は名主の傍らで画道に精進し、多くの門人を育てた。弟子には服部武陵や武田墨霞といった絵師がいた<sup>註5</sup>。多くの門人を残したという西塔太原だが、現在まで絵馬や天井画にはその名が確認されておらず、「□原」が「太原」である可能性はある。しかし、諏訪神社の絵馬中には安政4年（1857）の年号の記載があり、西塔太原は嘉永元年没ということから、没後に作品を奉納したのかという疑問が残る。そのため特定には至っていない。

西塔太原の門人たちの作品は天井画や絵馬にも多く確認されている。『中山町史』<sup>6・註5</sup>には、谷文晁に始まる西塔太原の門人筋を列举し、服部武陵、小松雲涯、武田墨霞、浅倉旭斎、佐藤北洲といった画家たちが名を連ねている。これらの画家たちは山形県内でも活躍した画家として位置づけられており<sup>註6</sup>、地域文化の一翼になっていたことがわかる。

服部武陵は文新田の豪農画家で本名は信義、十五代目服部文右衛門である。享保2年（1802）～明治8年（1874）。画家としてだけでなく、漢学、和算家、書道にも優れ、俳人としても活動した。私塾を開塾して多くの門人を育て、門人には小塩出身の小松雲涯がいた。小松雲涯は武陵より絵を学んだ後、江戸に出て南画の春木南溟（春木南湖の子）に師事し、帰郷後はやはり後進の指導に熱心だったという<sup>註5</sup>。愛染院、地藏堂の「旭斎」もまた、西塔太原の門人浅倉旭斎である<sup>註5</sup>。旭斎については詳細は確認できていないものの、大江町羽黒神社や獅子ヶ口諏訪神社本殿にも作品が確認されている。その子の大友素堂も服部武陵の門人で諏訪神社の絵馬にその名を確認することができる。



図4-21 獅子舞図  
／大友素堂  
西川町獅子ヶ口諏訪神社

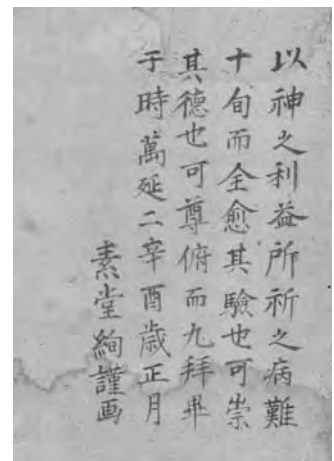


図4-22 獅子舞図（裏面）  
／大友素堂  
西川町獅子ヶ口諏訪神社

また、愛染院位牌堂の天井画の中には佐藤北洲や小松雲涯の弟子の菊池雲岳といった同門の名が並び、佐藤北洲は75才で高齢であり、画家が共同で制作にあたった様子が窺える。愛染院地藏堂でも年齢の記載が見られ、菊を描いた画面には「十三才 文貞女筆」と記されている。大江町羽黒神社には棕櫚を描いた天井画に「秀□ 十一才」という記載がある。幼少期から制作に参加していることが普通であったのか、既に画家としての参加か、或いは修業の一環であったかは不明だが、羽黒神社の「秀□」では、すぐ近くに同様の棕櫚の画面があり、画道の教育として実地に手本を見て描かせていた可能性もある。天井画が同一作者でありながら巧拙が入り混じっていることは熟練の度合いに起因するとも窺える。

愛染院地藏堂の「十三才文貞女」は人物が判明しており、渡邊文貞女（極月斎文貞）本名みち女という。山辺町の渡邊荘右衛門の長女で天保6年（1835）に生まれた。極月斎とは十二月（極月）にちなんだ名とみられ、絵は祖父に嗜みとして教わり、幼少から得意とした。8歳の時には山形市若木の文殊堂で開かれた画会に参加したという。成長後は細谷風軒（風翁）に私淑し画道に励んだ。愛染院地藏堂の天井画ではやや稚拙さが残るものの、13才として考えると非凡さともみられる。画家としての活動でも知られたが、夫が36歳

という若さで亡くなると教育者として知られるようになり、子女教育に大きな功績を残している<sup>8・注7</sup>。

今年度は天井画や絵馬が伝わっていたことで、師弟関係と共に画家同士の交流も盛んであったことを作品から窺うことができた。特に、石蘭亭の横五鳳や慈恩寺宝蔵院の雋斎は河北町や慈恩寺といった当時の地域文化の中心に位置していた人物で、五鳳は向本道寺、雋斎は大江町羽黒神社、獅子ヶ口諏訪神社といった天井画制作にも関与しており、画家の研鑽を発露する場としても機能していた様子がみて取れる。



図4-23 獅子舞図 獅子ヶ口諏訪神社  
(右上に作者銘「綺水堂 □原」)  
安政4 (1857)



図4-24 龍図  
□原  
大江町羽黒神社



図4-25 兎と木賊図  
□原  
西川町 向本道寺



図4-26 女図  
□原  
西川町獅子ヶ口諏訪神社



図4-27 蘭図  
□雋斎  
大江町羽黒神社

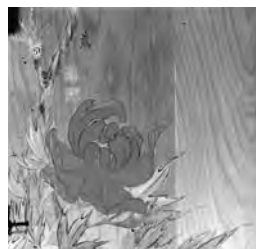


図4-28 牡丹図  
□武陵  
西川町獅子ヶ口諏訪神社



図4-29 龍図  
□武陵  
西川町獅子ヶ口諏訪神社



図4-30 龍図  
□佐藤北洲  
西川町愛染院位牌堂



図4-31 鶏図  
□佐藤北洲  
西川町愛染院位牌堂



図4-32 鷹図  
□菊池雲岳  
西川町愛染院位牌堂

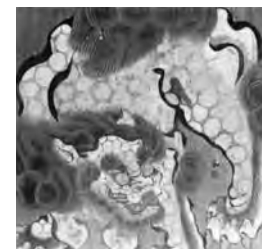


図4-34 獅子図  
□太嶺  
西川町獅子ヶ口諏訪神社



図4-35 鷹図  
□浅倉旭斎  
大江町羽黒神社



図4-36 蓮とセキレイ  
□浅倉旭斎  
大江町羽黒神社



図4-37 鷹と梅図  
□浅倉旭斎  
大江町羽黒神社



図4-38 菊図  
□浅倉旭斎  
西川町獅子ヶ口諏訪神社



図4-39 菊図  
／渡邊文貞女  
愛染院 地蔵堂



図4-40 竹図  
／秀□  
大江町羽黒神社



図4-41 棕櫚図  
／秀□  
大江町羽黒神社



図4-42 棕櫚図  
／不明  
大江町羽黒神社

#### ④ 高島町の絵馬の作者

##### 〈安達ヶ原の鬼婆図〉

大聖寺を再調査して確認した絵馬に観音堂の『安達ヶ原の鬼婆』を描いた絵馬がある。作者は太田霞岳で福島県二本松の画家で、名は弥吉、昭和9年に55才で没している。幼少より絵を好み独学で研鑽を積み、あらゆるものを器用に描いた。奇人とも評されたが地元では愛される存在だったという<sup>9</sup>。安達ヶ原の鬼婆は謡曲『足立ヶ原』、能の『黒塚』にもなっている伝説をもとにしている。画面をよく見ると緻密な描写が随所に見られるが、損傷や汚れが著しい。奉納者はやはり福島県二本松市の人物となっている<sup>18</sup>。



図4-43 「安達ヶ原の鬼婆図」  
／太田霞岳  
高島町 大聖寺（亀岡文殊）

##### 〈個人蔵「菊児童図」〉

今年度調査を行った個人宅の書画作品では「守息」銘の童子像が見られた。作品は一見して損傷が著しく、掛軸は上部が全て欠失しており掛けることはできない。幸い本紙に欠失は見られなかったが、横折れが全面に入っており、本紙の折れ山に沿って破損も多い。画題は水辺に佇む童子で、岸辺に菊が描かれることから「菊児童図」とみられる<sup>18</sup>。銘と落款は画面左下にある。

守息は米沢藩目賀多流の南目賀多家の祖として名前が記されている<sup>10</sup>。落款は目賀多守息の画の中に見られるものとなっている<sup>19</sup>。本作品が目賀多守息の作品であると断定はしきれないが、興味深い作品となっている。他の作品と共に保存箱内に収められていたものの、作品の損傷が著しかったために、和紙に包んで収めた。

米沢藩の御抱絵師である南・北両目賀多家の始祖は信明で、京で狩野派の絵を学んだ。洞雲（先祖書は東雲）と号して、定勝の頃に絵師として召し抱えられ、10人扶持15両を給された。明暦年間に死去した。洞雲の養子信相は幽雲と号して、北目賀多家の祖となった。

守息（もりやす）は洞雲の長男で、初名は吉之丞といった。承応年中に江戸に登り狩野探幽に弟子入りした。探幽は狩野派中興の祖と讃えられ、狩野派発展の基礎を築いた人物で多くの門人を輩出した。中でも桃田柳栄・久隅半兵衛は名を馳せたが、守息はこの兩人に劣らぬ画技を身につけ、佳作には師探幽の落款を許されるほどであったという。（「遺徳集」）

明暦年中に帰藩すると、六人扶持で絵師として召し抱えられ、延宝8年（1680）に法体して雲川と号し、元禄4年（1691）には法橋に叙された。後の雲川に対して、古雲川といわれた。宝永5年に、隠居して二人扶持を与えられ、正徳4年（1714）七十四歳で病死した<sup>10, 11</sup>。

##### 〈絵馬、唐獅子図〉<sup>1</sup>

目賀多守息の作品は大聖寺の調査にも確認されている。「唐獅子図」（図4-48）がその作品で、画面中には奉納者や守息の名とともに年号も記されている。唐獅子の描写は狩野永徳筆、国宝「唐獅子図屏風」によく似た獅子の図様<sup>12- 13</sup>となっており、永徳に比べ、描写の勢いは劣るものの動きのある画面となっている。全体の寸法は縦132.0cm、横150.5cmで、板4枚継ぎで裏面に棧を渡している。画面中央下部に「守息筆」、右端に「貞亨四年丁卯年十二月二十五日 □部氏平安長 敬白」、左上部に「晨昏不正 夙恩黙禱 獅子壺頭 奉懸金毛」という墨書がある（図4-48, 4-49）。

## ⑤ まとめと展望

絵馬のように地域に所在する作品は美術品としての書画と異なり、売買による移動が比較的少ないとみえ、地域における絵師の活動の記録となっている側面がある。今後、絵馬の集合している獅子ヶ口諏訪神社や大江町羽黒神社天井画のように多くの銘が確認される際に資料を集約していくことで、地域の絵師を見出す基礎資料として有効であると考えられる。(大山)



図4-43 菊児童図（斜光）



図4-44 菊児童図（本紙）



図4-45 銘と落款



図4-46 保管状況



図4-47 改善した保管状況



図4-48 絵馬「唐獅子図」



図4-49 赤外線画像（部分）



図4-50 狩野永徳筆「唐獅子図屏風」宮内庁三の丸尚蔵館 安土桃山時代  
（『金と銀一かがやきの日本美術』東京国立博物館 p.146,147、1999より転載）

#### (4) 山形県西川町獅子ヶ口諏訪神社の幕末～明治期の落書きについて

山形県西川町の獅子ヶ口諏訪神社本殿扉には、幕末～明治時代初期にかけてと思われる落書きが多数存在している。その数は膨大であり、なかには重ね書きされているところもあるなど、解読や釈文の立て方が困難な部分も多い。その整理にはなお時間を要するが、本稿では、2012年7月3日に行われた拝殿内部板壁の赤外線写真撮影ならびに実見調査を踏まえて、拝殿内部板壁の落書きの特徴について現段階で気づいたことを簡単にまとめてみたい。



図4-51 赤外線画像

##### ① 落書きの年代

落書きの基本的なパターンとしては、参詣の年月日、住所や屋号、氏名などが一連のものとして書かれているが、多くの場合は年紀を省略している。だがそのなかで、年紀が記されているものを拾い上げていくと、「嘉永元年」「嘉永三年」「明治十年」「明治十五年」などの年紀が見られ、幕末～明治初期にかけてのものであることがわかる。年紀が見られない他の多くの落書きについても、書風の共通性から、おおむね幕末～明治初期にかけて集中的に書かれたものであると思われる。

##### ② 落書きに書かれた地名

落書きのなかには参詣者の住所を書いたものも見られる。それらを拾い上げていくと、「山形十日町」「山形八日町」「羽州村山郡」「上山」「米沢」「置賜」「寒河江」「西根村」「谷地」など、いまの山形県内の地名が多く見られるほか、「越後国」「岩代国」「会津北方」「若州」（若狭国）「甲州」など、各地から参詣に訪れたことを示す落書きも存在している。さらには「諸国 修行 江戸住 美声斬 優光 恋情 祈念」と書いた落書きなどもあり、江戸からも参詣に訪れていた様子がうかがえる。

##### ③ 獅子ヶ口神社の落書きの歴史的意義

獅子ヶ口神社本殿扉の落書きは、幕末～明治初期にかけてのまとまった資料群であり、この当時の人々の参詣の実態を知る貴重な歴史資料といえる。山形県内には、江戸初期の落書きが残る寺院や仏堂が数多く見られるが、本神社の落書きは、それとは異なる時期の落書きであり、落書きの書風やパターンも、江戸初期のものとは趣を異にする。歴史資料としての落書きの時代的変遷を探る上でも、重要な意味を持つものと思われる。（三上）

#### 4. 地域文化遺産としての絵馬とその価値

##### (1) 応急処置による価値の再評価

天井画調査や絵馬調査を通じて、地域で活躍していた画家やお抱え絵師の作品を見出すことに繋がりはじめたことが今年度の進捗状況だが、昨年度の報告にもある通り、損傷が著しいことが課題となっている。絵馬は他の書画作品と異なり屋外や外気にさらされる環境におかれ、損傷しやすいため、損傷が進むことで価値が損なわれたと判断され、修復されないこともある<sup>21</sup>。地域文化遺産としての特徴の一つは、美術品よりも民間信仰に根差すものとして捉えられる為か、売買され移動することは他の書画作品に比べて少ない傾向が窺えることである。地域間で他の作品と比較することで、共通する作者を見出せることもそのおかげとなっている。損傷するとお炊き上げなどが行われて、供養されたことも想像されるため、修復対象と捉えられなかったとも窺えるが、時折、和紙による補修が行われている例を見ることもある（図4-52）。



図4-52 下部に貼られた和紙

絵馬が奉納される場では集約して奉納されていることも多く、獅子ヶ口諏訪神社のように、多くの絵馬が所在する場所では、個々の作品価値が見出せたとしても、負担が大きく保存継承を図ることは難しい。今年度調査から作品の評価についてみてきたことの一つは、地域で活動していた絵師や画家の作品には、巧拙が入り混じっている点であった。理由としては修行や教育と一体となっていた可能性や、文化人の余技であった可能性を指摘することができるようである。但し、判断材料は少なく個々の作品価値のみから地域におけ

る文化的価値を判断することは難しいようである。地域で活躍した画家たちの評価には今後の研究により多くの作品が明らかになることは不可欠で、絵馬に年代が記載されていることが地域の書画を研究する上で重要な要素となるとみられる。そのためには、多くの絵馬が所在する状態が維持されて、より多様な比較ができる環境が持続することにある。そこで、絵馬の損傷と東洋絵画修復における修復処置を再確認して、地域文化遺産としての絵馬の保存における有効な手段について考察する。

## (1) 損 傷<sup>1, 2</sup>

これまでも、度々損傷要因については生物被害（虫）、動物被害（ネズミ、鳥、蝙蝠）、微生物被害（カビ、藻類）、自然劣化、人的被害（破棄、放置）といった様々な要因があることは報告してきた。また、地域による傾向か、獅子ヶ口諏訪神社調査時には夥しい数のカメムシが画面に付着しており、損傷部から内部に潜り込んでいた事例も確認している。絵馬の損傷がどのように進行するか、損傷部を図示して見てみると（図4-53、4-54）、虫の侵蝕が額縁に沿って広がって虫の侵蝕と本紙の損傷は重なる部分が多く、額縁周辺部から内部に向かい進行することがわかる。額縁の下部に損傷が見られないのは、既に補修のために和紙が貼られていたためで、実際にはもっとも損傷が著しい。これは、絵馬の下部が長押などに接してそこから虫が侵入するため、額縁を伝って内部に侵蝕が進行する。

また、展示される際は上部が手前に傾いて掛けられ、裏面に塵埃が堆積することが多く、画面に対して裏面への汚れの影響は比ではない。塵埃が堆積することで、虫や微生物の温床となり損傷が進行する傾向は強い<sup>注10</sup>。

また、獅子ヶ口諏訪神社や、対象地域の絵馬は大半が明治以降に制作され、中には酸性化の影響から極端に劣化が進んでいるものも見られる。



図4-53 虫ナメ



図4-54 本紙損傷



図4-55 裏面に蓄積された塵埃などの汚れ

## (2) 本格修理

現在の絵画における文化財修理では、作品の肌裏紙を交換する本格修理が主流となっている。

（図4-57）をもとに修理の工程をみると<sup>14）</sup><sup>注11）</sup>作品の本紙部分と、パネル部分に分離して、本紙の肌裏紙の交換や損傷部の補填（補紙）を行い、再度支持パネルに貼り込んで仕立て、損傷部の補彩を行い全体を調和させる処置となっている。その間、汚れなどの劣化要因はクリーニングや裏打ち紙の交換で除去され、損傷などのゆがみも修正される。新たな骨組みや手漉き和紙を用いた支持パネルの採用などにより、再修理可能な保存性を確保しながら作品継承を行うことができる。一方で、作品一点にかかる労力が大きく、大量の作品に対応することが難しい。



図4-56 修理前



図4-57 修理概略



図4-58 修理後

### (3) 清掃と応急処置

数多く所蔵されている絵馬や著しい損傷に対して、調査時に応急処置を行うことで作品の保存に繋げる取り組みは既に始めている。昨年度の報告にもあるように、作品に対して適切な処置となりうるかが課題で、処置を行うことで損傷が進行することを避けたいという点では、本格修理とも同様の課題を持っている<sup>2</sup>。

絵馬の損傷の進行や解体修理の流れをみると、改めて、作品の裏面と額縁といった作品周辺の清掃が重要であることがわかる。作品環境の改善を図り、損傷を予防することから保存を図る取り組みにもつながっているともいえる。本紙に触れないため、清掃については修復家でなくても取り組むことができるため、作品調査と併行して行うことで、作品環境を維持する効果が期待できる。

今年度の調査に際して併行して行った応急処置は以下の方針を基本にして行った。昨年の課題に挙げていた通り、使用する材料や方法など課題は多いが、損傷が応急的にでも改善することで、絵馬の作品群に対する一時的な保存処置としては有効と考えている。また、応急処置を進めることで、所蔵者や鑑賞者への再認識を促す効果があることが確認されている<sup>2</sup>。



図4-59 刷毛による裏面の清掃

#### 〈応急処置の方針〉

- ・ 解体しない
- ・ 裏面を掃除する
- ・ 損傷を一時的に接着して、穴を塞ぐ。
- ・ 後で剥がせる接着剤を使う。



図4-60 慈恩寺本堂



図4-61 久昌寺本堂

### 5. まとめと今後の展望

本年度新たに行った天井絵調査などで、作者を検討する際、同一名のある絵馬が資料として有効であった。絵馬は奉納されてから移動することが少ないことで地域文化の年代記録の資料としても価値を持っている。また、その際には掛軸などの絵画作品とは異なり、個々の作品ではなく、集合体としての価値が強いといえる。しかし、獅子ヶ口諏訪神社で顕著であったが絵馬の保存で問題となるのは程度に差はあるものの損傷していることであった。屋外や外気にさらされる環境に置かれやすく、損傷しやすい傾向が顕著で、損傷が進行することでさらに損傷を生むという悪循環に陥りやすい。また、対象地域に所在した絵馬の多くは明治以降に制作されている。近代に入り、洋紙の流入に伴って、酸性紙の影響から劣化が進行している一面もある。作品の価値を見出す上で、古い作品に高い価値を見出すのは当然だが、絵馬の場合は作品数が多いうえに、素材の脆弱さは近代以降のものほど著しく、損傷が速いという逆転現象ともなっている。そのため、価値のある作品から一点一点修復を行って作品を維持することは現実的に難しいため、清掃活動や応急処置により作品の現状を維持することは有効な保存処置となると考えられる。また、この場合の応急処置は個々の作品に対する修復処置としてだけでなく、作品群の視覚的印象を向上させることで、絵馬が存在する空間を再評価する処置としても機能していると考えられる。

次年度、実施内容は以下の通り。

＊巨海院文書調査：目録作成へ向けた調査の実施。文書の保存管理方法の検討

＊獅子ヶ口諏訪神社：天井絵と獅子頭、墨書を含めた諏訪神社の研究

＊地域の絵師の活動：目賀多守息の調査研究、天井画調査、調査記録と絵師一覧の作成。

＊調査と応急処置：書画調査、絵馬調査と応急処置方法の検討

---

## 注

- 注1) 中性紙の封筒は宮城資料ネットワークなどが使用しているものと同様のものとした。保存箱は文書保存用の中性紙による「もんじょ箱」を使用。特種紙商事株式会社製。
- 注2) 東北芸術工科大学非常勤講師（日本美術史）山田烈氏の所見による。但し、本年度は画像からの所見となっており、詳細は改めて行う予定である。
- 注3) 『平成23年度東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター研究成果報告書』、p.47、図2-61、2012による。
- 注4) 『河北町の歴史』河北町誌編集委員会、p.922、1962による。
- 注5) 『中山町史 下巻・近現代』中山町、p.358-362、2005による。
- 注6) 『続・山形県芸術文化史』山形県芸術文化会議、p.293-297、1983による。
- 注7) 『山辺町史』山辺町史編集委員会、p.475-478、2005による。
- 注8) 山形大学講師（日本美術史）佐藤琴氏との調査による。
- 注9) 伝国の杜米沢上杉博物館への画像確認による。
- 注10) 展覧会図録『金と銀 - かがやきの日本美術』東京国立博物館、p.146-147、図版159、1999による。
- 注11) 平成23年度に文化財保存修復研究センター東洋絵画修復室において実施した慈恩寺本堂絵馬の状態調査より。
- 注12) 「喜多方市館稲荷神社「農耕絵馬」の保存修復」『年報2011』東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター2012、p.14-15による。

## 参考文献

- 1) 『平成21年度東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター研究成果報告書』、2010。
- 2) 『平成22年度東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター研究成果報告書』、2011。
- 3) 『山形県神社誌』山形県神社庁、2000。
- 4) 金山耕三『寒河江・西村山地区の絵馬 ―獅子ヶ口諏訪神社を中心に―』、p.32-p.44 山形県立博物館研究報告1985
- 5) 『河北町の歴史 上巻』河北町誌編集委員会、1962
- 6) 『中山町史 下巻・近現代』中山町、2005
- 7) 『続・山形県芸術文化史』山形県芸術文化会議、1993
- 8) 『山辺町史 下巻』山辺町史編集委員会、2005
- 9) 『二本松市史』二本松市、2002
- 10) 『米沢市史 第2巻（近世編1）』米沢市史編集委員会、1991
- 11) 『米沢市史 第3巻（近世編2）』米沢市史編集委員会、1993
- 12) 『金と銀 - かがやきの日本美術』東京国立博物館、1999
- 13) 『大江町史』大江町教育委員会、1984
- 14) 『年報2011』東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター、2012

## 高畠石の外構利用とその集落景観

北野博司 長田城治

### 1. はじめに

#### (1) 高畠石とは

高畠石とは、高畠町一帯から採掘された凝灰岩石材の総称で、土木建築、生業、信仰など、生活のあらゆる場面で広く利用されてきた。一定の産出量を有した丁場の石材は「大笹生石」「細越石」「羽山石」「味噌根石」「沢福等石」「西沢石」「瓜割石」「金原石」「高安石」「海上石」のように町名（字名）で呼ばれたほか、私有地から採掘する個人単位の小さな丁場まであり、その数は定かでない。細越からは灯籠のような細工物に使う「細工石」が産出した。

本格的な採掘がはじまったのは大正期以降といわれ、最も新しい瓜割山丁場では戦後に最盛期を迎えた。溝掘り採石法により連綿とその技が受け継がれてきたが、平成22年まで採掘していた最後の伝統的の石切職人が引退し、機械切り出しも含め、その生産はほぼ停止している。

#### (2) 高畠まちあるきプロジェクトについて

町並みの日常の風景に溶け込んだ「高畠石」を、住民らとともに探索し、1点1点記録していく。聞き書きによりその由来を辿ることで、石に込められた土地の記憶が徐々によみがえってくる。そこには地域固有の自然資源を有効に、持続的に利用してきた知恵や技術、信仰の姿が垣間見え、有形・無形の遺産として存在する。その歴史的・文化的価値を研究し、地域の伝統の上に新しい町のあり方を模索するプロジェクトである。

従来の文化財の枠組みにとらわれることなく、むしろこれまで見向きもされなかった、ありふれた「石」とこれを採掘、利用するワザに意識的に目を向け、多種多様な資源利用形態をあぶり出す。それらを地域が歩んできた生業や経済、信仰などの変遷のなかに位置づけ、石と人・社会との関わりを読み解いていくことで、地域の個性的な歴史・文化的景観を浮かび上がらせてみたい。

これまでの活動を通して、高畠石の生産・流通・消費の実態が徐々に明らかにされてきた。この活動のもう一つのねらいは、住民が他者と交流しながら自ら土地のアイデンティティを再発見していくことである。さらに学生をはじめとした若者たちとの間に、学び、伝えあうという異世代交流が実現することも重要である。

身近な地域の自然資源—高畠石を使い続けてきた伝統的な暮らしのなかに、どのような現代的価値があるのか。遺産を継承するリスクを抱えながら、どう伝え、どう変わっていくのがよいのか。そのような問いを住民とともに思考する場としたい。

また、調査活動そのものを地域に残すことが二つ目の狙いである。調査方法を可能な限りマニュアル化し、本プロジェクト終了後も、必要とあらば地域が主体となって同様の調査ができることを念頭に置いている。



図5-1 高畠町の位置



図5-2 調査風景



図5-3 調査風景



図5-4 調査風景

## 2. 実施体制と活動実績

### (1) 実施体制と調査活動

本学文化財保存修復研究センター、高畠町教育委員会、地元で結成された「高畠石の会」がそれぞれ長所を生かしながら合同で調査を実施している。

今年度は、月1回の「まちあるき」イベントを核とし、二井宿街道沿いの民家を悉皆調査し、現状での高畠石の利用状況を記録した。9月には夏休みを利用して、5日間の集中調査を実施した。

調査は、東北芸術工科大学の研究員と学生、高畠石の会のメンバーが3～4班に分かれ、住民の協力を得ながら、宅地内の石材分布図とリストの作成、石材寸法の計測、写真撮影、来歴等のヒアリングを行っている。

これまでの2年間で、最終的に二井宿街道沿いの安久津、鳥居町、下駄子町、上駄子町の調査を完了した。対象地域は延長約3.3km、172戸の住宅とし、2962件の石を調査した。現在、収集したヒアリング情報の整理とイラストレーターを用いて実測図面のトレースを行っている。

表5-1 今年度の調査

|       |              |
|-------|--------------|
| 第 8 回 | 5月 20 日 (日)  |
| 第 9 回 | 6月 17 日 (日)  |
| 第10 回 | 7月 22 日 (日)  |
| 第11 回 | 9月 3～7 日     |
| 第12 回 | 10月 14 日 (日) |
| 第13 回 | 11月 18 日 (日) |
| 第14 回 | 12月 2 日 (日)  |

### (2) 活動実績

4月17日に地元、安久津公民館で1年間の調査成果の報告会を行い、住民と意見交換をした(図5-6)。さらに、4月21日に高畠町交流プラザで、高畠石の里まちあるきシンポジウム「高畠石の歴史を紡ぐー未来への活かし方を求めてー」を開催した(東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター2012、図5-5)。全国的視野から「石の町」の調査とまちづくりを考えるために、竜山石の総合調査で実績のある兵庫県高砂市や、房州石の調査から遺跡の活用まで先進的な取り組みを行っている千葉県富津市から関係者を招いて意見交換した。また、平成25年3月28日には高畠町文化財保護会主催のシンポジウム(共催：高畠町教育委員会、高畠石の会)で講演を行い、高畠石の歴史的・文化的価値の背景を発表し、高畠石の今後の活用方法などについて意見を頂いた(図5-7)。

また、まちあるき調査後には、調査時の発見や臨場感を伝える「まちあるき通信」の発行を行っている(図5-9)。これは、研究員や学生が作成しており、高畠石の会や調査を行う地域住民の方に配布することで、調査活動やその内容がわかるよう意図したもので、現在14号を数える。

昨年度の調査でクローズアップされた、高畠石採掘の歴史を物語る「石材記念碑」(明治44年建立、図5-8)に対して、石製の解説板が設置された。高畠石の会が仲介となり、本センターが解説文を書き、高畠町が費用を負担して設置された。高畠石のある町並みのランドマークとして、ふるさとの歴史教育や観光に生かされる。(北野)



図5-5 シンポジウム



図5-6 現地報告会



図5-7 講演会



図5-8 石材記念碑



図5-9 まちあるき通信

3. 本稿の目的と方法

高畠石は、山形県高畠町一帯で採掘される石材の総称であり、江戸期から現代まで職人の手掘りで採掘されたこと、各戸が備蓄して外構等に多用したことで独特の集落景観が形成されたことを昨年度報告した<sup>注1</sup>。平成24年度も引き続き、石工が多数居住した高畠町安久津・二井宿地区を対象に、二井宿街道沿いの172戸について高畠石の利用の悉皆調査を実施した。全体における調査成果については、章末に掲げる図に示した。

本稿では、この成果を基に、高畠石の住宅における利用傾向と生産との関係について検討するものである。

4. 高畠石の住宅における利用傾向

高畠石の住宅における利用は、表5-2に示す12種に分類でき、安久津・二井宿地区の二井宿街道沿いの172戸のうち、現在居住する建物が存在する146戸について各戸での利用頻度を集計した。以下、種類別に傾向を検討する。

(1) 土留石・境界石・基礎石・敷石

土留石は敷地内の水路や植栽、畑の土留め、境界石は敷地・建物境や雨落ち・犬走りなどに用いるもので、その採用率は土留石が87%、境界石が83%と極めて高い。また階段・敷石(68%)、建物の基礎石(64%)がこれに次ぎ、高畠石の典型的な利用方法といえる。石材は角石が基本で、特に上位2種は高畠石の定尺である「一二八」(1尺2寸×8寸×6尺)を加工せずそのまま用いる。

利用の年代傾向を、明治20年代以降の土地台帳と住宅地図から整理した土地の購入・転入履歴で見ると、基礎石は戦後に購入・転入した家では採用が45%と低い。これは昭和46年の建築基準法改正以降、基礎が鉄筋コンクリートに転じたためである。ただし、戦前期の土地購入・移動に限れば76%と高く、法改定以前はほぼ全てで利用された可能性が高い。一方、土留石や境界石、階段・敷石は年代に関わらず利用率が高く、法改定後も外構では継続したといえる。

(2) 門柱・石塀

門柱・石塀は、146戸中36戸でみられ、採用率が29%と低く、同じ凝灰岩の産出地である徳次郎地区(栃木県宇都宮市)などでみられるような石塀が連続する利用と相違する。石塀全76ヶ所の積み方をみると(図5-15)、板塀と組み合わせる板塀連結型(5ヶ所)、「一二八」と短い角石を格子状に交互に



図5-10 土留め石



図5-11 土留め石・水路



図5-12 境界石



図5-13 基礎石



図5-14 敷石

表5-2石材利用の傾向

数字：%

|        | 土留石 | 境界石 | 階段・敷石 | 基礎石 | 生活用品類 | 集石 | 庭石類 | 信仰類 | 門柱・石塀 | 建物類 | 生業類 | その他 | 戸数(戸) | 種類数(種) | 平均利用 |
|--------|-----|-----|-------|-----|-------|----|-----|-----|-------|-----|-----|-----|-------|--------|------|
| 明治期以前  | 91  | 93  | 74    | 76  | 68    | 63 | 62  | 51  | 38    | 30  | 27  | 18  | 82    | 6.9    |      |
| 大正～戦前期 | 100 | 78  | 89    | 78  | 56    | 56 | 44  | 56  | 33    | 22  | 22  | 22  | 9     | 6.6    |      |
| 戦後     | 78  | 69  | 56    | 45  | 35    | 35 | 38  | 27  | 15    | 13  | 7   | 11  | 55    | 4.3    |      |
| 合計     | 87  | 83  | 68    | 64  | 55    | 52 | 52  | 42  | 29    | 23  | 19  | 16  | 146   | 5.9    |      |
| 石工     | 91  | 88  | 76    | 76  | 61    | 64 | 67  | 45  | 24    | 30  | 27  | 12  | 33    | 6.6    |      |
| その他    | 86  | 81  | 66    | 61  | 53    | 49 | 48  | 42  | 30    | 21  | 17  | 17  | 113   | 5.7    |      |

積み上げる混合型（3ヶ所）、短い角石を上部2段目のみに配置する一部混合型（33ヶ所）、接合材を用いて全面に角石を積み上げる整列型（18ヶ所）、ほぞや接合材無しで角石を積む野積み型（17ヶ所）の5種に分けられる。野積み型以外は石に額縁の加工を施し、門柱を付属する例が多い。聞き取りにより年代が判明する37ヶ所でみると、整列型は明治期から現在まで渡るが、板塀連結型と混合型は明治期以前、一部混合型は大正期以降、野積み型は昭和40年代以降に限定され、建築年代により形式が異なる。整列型・一部混合型・野積み型の3種は、特に昭和40～60年代に主屋などの建替えの際に造られたものが多く、野積み型は前身主屋の基礎石を転用して建てられた。また、明治期以前の石塀を持つ4戸は、全て石切り丁場の土地を所有する地主か、または広い農地を有する大地主であることから、石塀は当初は有力家でのみ建築されたが、昭和40年代以降一般層に広がったといえる。



図5-15 石塀の形式

### (3) 建物類・生業類

腰壁や石蔵など建物類、サイロやコエヅカ（堆肥置場）などの生業類は、共に利用率が2割前後で低い。

石蔵は、調査範囲に3棟しかなく、高島町全域でも8棟のみで、いずれも福島市から昭和19年に移住した石工山田氏とその弟子により、昭和20～50年に建てられた。石工は、昭和40年代まで「一二八」10間を米1俵と交換して食米としたとされ、石工ごとに米を取引する家が決まっていた。石蔵8棟のうち5棟はその取引先に当たり、交換により蓄積した石材の利用のために建設したという。したがって石蔵はごく一部の特殊例で、高島石は、利用そのものは多いにも関わらず、先述の塀も合わせて、建築への利用は基礎石以外少ない点が特徴といえる。これは、同じ凝灰岩である大谷石の産地では石蔵や石塀が建ち並ぶ姿と対照的だが、高島石は機械化せず職人が手掘りしたため、「一二八」1本の採掘に一日を要し、石蔵に必要な材料の入手が困難であったためと考えられる。

サイロは、大正初期の酪農の導入後に建てられ、昭和60年代に歴史公園の敷石用に取り壊されたため、現存例は10棟と少ないが、かつては多く存在したという<sup>注2</sup>。



図5-16 石蔵（昭和24年建築）



図5-17 石蔵（昭和32年建築）



図5-18 石蔵（昭和45年頃建築）



図5-19 サイロ



図5-20 サイロ



図5-21 コエヅカ

#### (4) 生活用品類・庭石類・集石

旗竿石・石炉・炉縁などの生活用品類は採用率が55%、ナツカワと呼ぶ大きな手水鉢や灯籠など庭石類は52%、屋敷明神や石碑など信仰類は42%である。また、敷地内に石を備蓄する例（集石）も半数でみられ、石は主に角石で、取り壊した建物の基礎石が多い。近隣の不要な石や石橋を持ち込んだ例もあり、石を備蓄する慣習が特筆される。



図5-22 ナツカワ

### 5. 高畠石の利用と生産との関係

#### (1) 高畠石の丁場と地主・石工

高畠石の主要な丁場は図5-25に示すように12ヶ所あり、いずれも採掘量が少ないため、主に高畠町やその近隣で消費された<sup>注3</sup>。二井宿街道沿いの集落は、西から安久津・鳥居町・駄子町・二井宿・上駄子町に分けられ、味噌根・沢福等・瓜割・二井宿の4丁場に近い(図5-26)。このうち沢福等丁場は、慶応元年から採掘が始まり平成19年まで続いたが、味噌根丁場は明治初期から昭和10年代<sup>注4</sup>、二井宿丁場は明治期から昭和30年代<sup>注5</sup>までで期間が短く、瓜割丁場は最も遅く大正12年に始まり平成22年まで採掘された。



図5-23 屋敷明神

沢福等丁場は、良質な石材が採れる丁場とされ、硬く風化が少ないことから、敷石・塀など外構用に重宝された<sup>注6</sup>。また瓜割丁場は、沢福等の後継として採掘が開始された新しい丁場で、唯一山麓部に位置することから移動や搬出の利便性が高く、旧高畠駅舎(昭和9年建築、図5-27)にも利用された質の高い石が採れた。一方味噌根丁場は、山頂部にほど近く、石材が柔らかく風化が激しい<sup>注7</sup>ため、外構への利用が住民から敬遠された。



図5-24 集石

これらの丁場は、沢福等は少なくとも4戸、瓜割・味噌根は各1戸の地主が所有し、沢福等の地主は鳥居町・二井宿、瓜割の地主は駄子町、味噌根の地主は安久津に居住した。一方石工は、冬季の農間仕事として従事する兼業が多く、聞き取りによれば調査範囲において石工経験者を有する家は33戸で2割強に当たり、特に鳥居町(14戸)と駄子町(11戸)に多い。採掘

表5-3 地主・石工家の所在地 数字：戸数

|      | 味噌根 |      | 沢福等 |      | 瓜割 |      | 全体 |      |
|------|-----|------|-----|------|----|------|----|------|
|      | 石工  | 丁場地主 | 石工  | 丁場地主 | 石工 | 丁場地主 | 石工 | 丁場地主 |
| 安久津  | 1   | 1    |     | 1    |    |      | 3  | 2    |
| 鳥居町  |     |      | 6   | 2    | 3  |      | 14 | 2    |
| 駄子町  |     |      | 2   |      | 4  | 1    | 11 | 1    |
| 二井宿  |     |      | 3   | 1    | 2  |      | 3  | 1    |
| 上駄子町 |     |      | 1   |      | 1  |      | 2  |      |
| 全体   | 1   | 1    | 12  | 4    | 10 | 1    | 33 | 6    |



図5-27 旧高畠駅舎

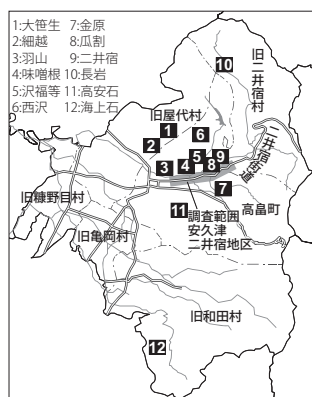


図5-25 高畠石の丁場の位置



図5-26 石切り丁場と集落の位置

丁場が判明する石工は19戸で、味噌根丁場は1戸だが、沢福等丁場は12戸、瓜割丁場は10戸で二分し、両方で働いた石工も4戸存在する。集落ごとにみると、安久津は味噌根丁場に限定するが、他は沢福等と瓜割が混在し、鳥居町・二井宿は沢福等の石工が多い一方、駄子町は瓜割の石工が多数を占める。これは、各丁場の地主の居住地と一致し、石工は集落に居住する地主の丁場と密接な関係を持ったといえる。

## (2) 地主・石工家にみる石材利用

次に、石工経験のある33戸の石材利用をみると、採用した種類数は平均6.6種で、石工以外が5.7種であることと比べて多様である。特に階段・敷石、基礎石の採用が7割5分を超えることに加え、生活類、庭石類など加工を要する利用や集石が6割以上でみられる。

一方、丁場地主の6戸では、種類数が9～12種と多く、1戸を除き石塀を有する。沢福等丁場の地主である島津家（鳥居町・図5-28）を例にみると、敷地境界や全建物の周囲に連続して石を配置するほか、石塀が前面と側面の3ヶ所にあり、敷地内の2ヶ所に石を備蓄するなど、大量の石材を用いている。これは、石工が丁場地主に対する採掘料を現金と石材で払ったため、丁場地主の家に多くの石が集積された結果といえる。島津家では、聞き取りにより利用年代をみると、稲蔵・薪蔵など付属屋の基礎石やサイロを除き明治期にほぼ現在の姿になっており、明治期には石材の用法が確立したことになる。

一方、味噌根丁場の地主である佐藤家（安久津・図5-29）の場合、種類は10種と多いものの、水路の土留石は一部のみで、敷地の境界石も前面側に限られる。安久津では地主以外も、明治期以前から居住した家の石材利用が平均6.3種で他集落より少ない。これは味噌根石が外構に適さなかったため、担当する丁場の特性が集落ごとの石材利用に影響を与えたといえる。

## 6. まとめと今後の展望

以上のように、高畠石の採掘に関わった安久津・二井宿地区では、角石が石工から丁場地主への採掘料の支払いや米との交換など金銭に代わるものとして用いられた。丁場地主らに石材が集積したことから、多様な石材の利用方法が明治期には確立し、資産価値を有する石材の使用が財力の象徴として定着して、採掘量の増加を背景に一般層にも普及した。角石を各戸で備蓄する集石という慣習もここから生まれたものとみられ、利用する場合も加工が必要な石塀や石蔵は少なく、角石をそのまま用いる土留石や境界石、基礎石等を主とし、転用・再用品も繰り返された。

来年度はまちあるき調査を継続し、種類ごとに形式や利用の特徴を明らかにすると共に、シンポジウムや地区ごとの調査報告会、高畠石や丁場を利用したイベントの開催を通して、地域住民への高畠石の価値の普及やその保存活動に取り組みたい。（長田）

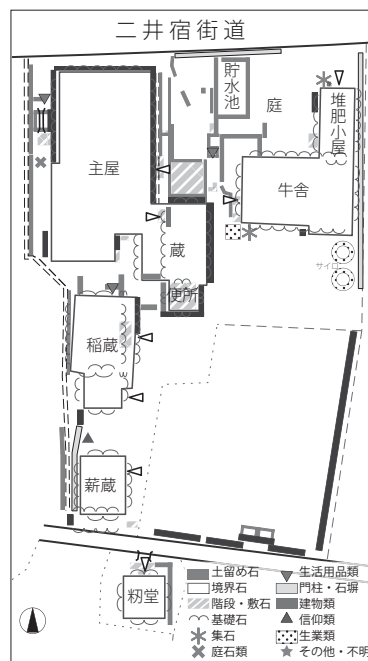


図5-28 島津家における石材利用

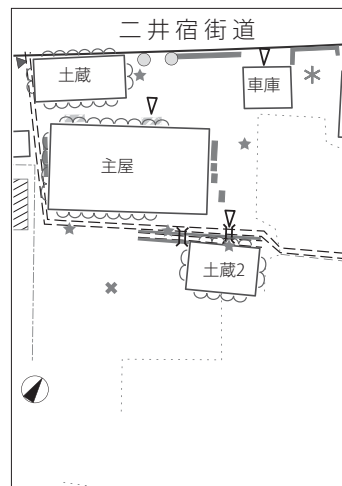


図5-29 佐藤家における石材利用

### 注

注1) 長田城治：山形県高畠町における高畠石の生産と集落景観,日本建築学会学術講演梗概集、2012。

注2) 本田利男氏他2名への聞き取りによる。

注3) 注1に同じ。なお主要な丁場は、調査により二井宿・長岩が新たに判明し、計12ヶ所とした。

注4) 味噌根丁場の地主佐藤康夫氏への聞き取りによる。

注5) 瓜割の石工引地兼二氏への聞き取りによる。

注6) 戸田勇喜氏他3名への聞き取りによる。

注7) 須藤庄吉氏への聞き取りによる。



図5-30 安久津～二井宿地区における高畠石の利用1

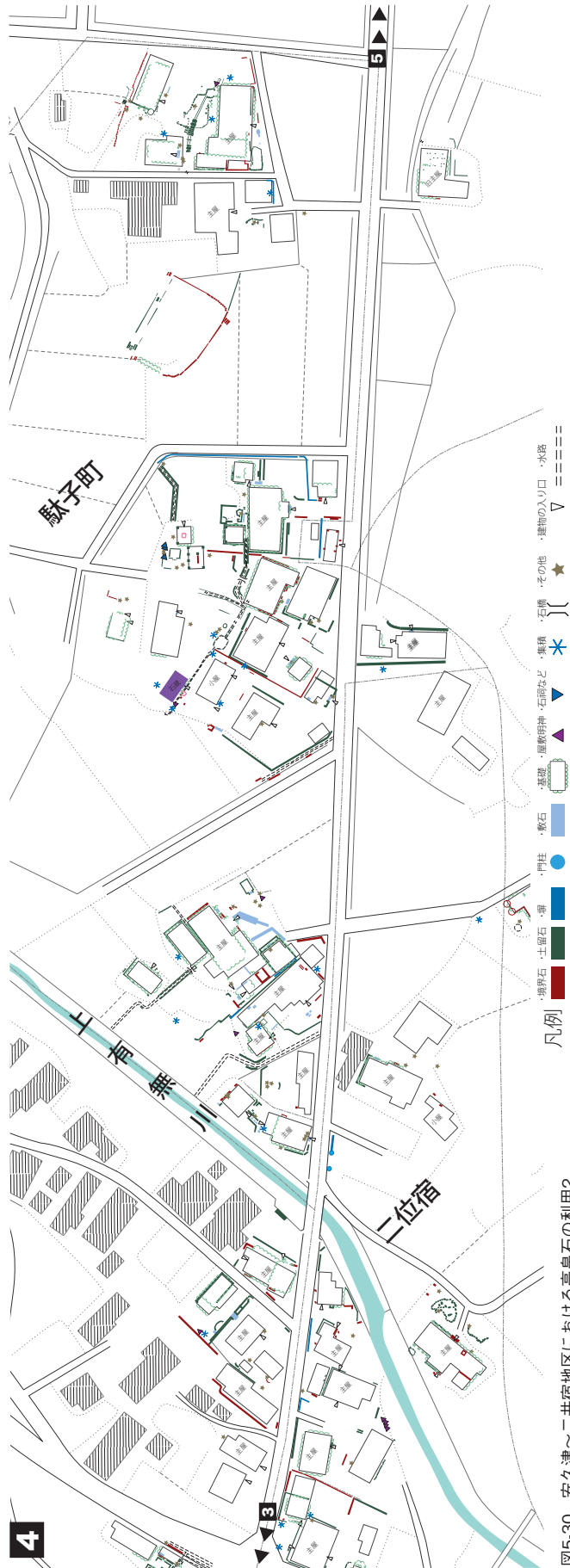
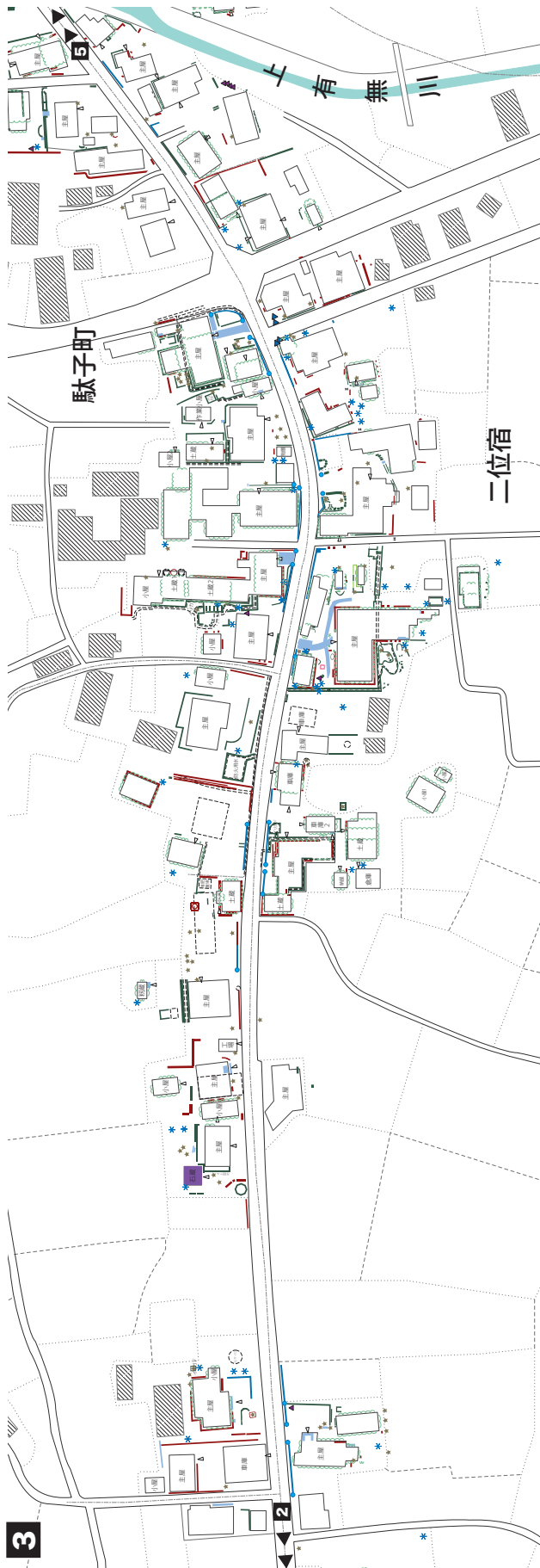


図5-30 安久津～二井宿地区における高畠石の利用2



## 高畠石を活かしたまちづくり

渡部 桂

### 1. はじめに

「まちづくり」の概念は抽象的で、まちの運営に関わるあらゆる事象を扱う。その内容は多種多様、複合的な要素を持ち、故に何をどう扱うのが曖昧になることも多い。

「まちづくり」の主題は様々ある。各種産業振興、文化振興、都市施設整備、防災強化、福祉の充実、コミュニティ形成、地域ブランディング、景観、環境、交通、まちなみ保存・再生、エネルギー、中心市街地活性化などあげれば切りがない。施設整備（ハード）と運営・仕組みづくり（ソフト）の内容に大別はできるが、実際は入り組んでいる。個別の問題もあれば相互に関係しあう問題も多い。さて、「高畠石」は「まちづくり」とどのように関係しているのか。あるいは関係して行けるのか。それを少し整理してみたい。

### 2. 「まちづくり」の帰納と演繹

「まちづくり」の主題が様々あることは先に述べた。帰納的に考えれば、多数ある主題ごとに問題を明確にして解決することや、既にあるまちの良さを伸ばすことなどを合わせることで、全体が良くなると想定することはできる。しかし、実際は主題ごとの縦割りの仕組みで弊害が起こることはよく耳にする話である。差し当たり目の前の問題を片付けて行く方法の他に、地域の特性を理解することで地域の全体像を捉え、それを共通の理解としてまちの目標を合意し、各種の応用的な取り組みの展開を発生・連動させるという方法も考えられる。それは演繹的な方法と位置づけられる。帰納的な方法との違いは、応用的にあるいは自由に展開される活動が、基盤の地域性のところでは通底するであろうことにある。

帰納と演繹、どちらからが「まちづくり」に適した方法かということではなく、帰納的手法と演繹的手法を適宜組み合わせることが複雑系の性格を持つ「まちづくり」には有効だろう。しかし、地域の特性が意外に理解されておらず、理解されていても「まりづくり」の現場まで貫かれている例は少ない。

### 3. 演繹的に考える「まちづくり」

その地域がどのように成り立っているか。このことを理解することは、そこに暮らすということにおいて重要である。即ち、土地の成立ちを理解することでこそ相応しい土地利用がなされ、相応しい産業が成り立つ。相応しいということは合理的で効率的ということでもある。大抵その場所で長い時間人が暮らしてきた歴史があれば、世代時代を超えて適切な振る舞いが見出され、洗練され、最適なあり方に収束している。日常生活でそこまで意識を向ける人は少ないが、そこにこそ地域の特性を踏まえた暮らし方生き方が横たわっているはずである。そのような地域の成り立ちと暮らしの関係がより多くの人に理解されれば、各々自由にそして多様に展開される「まちづくり」は、結果的に自ずと地域の特性を浮かび上げ、纏まりを持ち、競争力のあるものになるのではないだろうか。

### 4. 「高畠石」がどのように地域を特徴づけているか

山形県高畠町を中心に隣接する南陽市を含む一帯は凝灰岩で覆われており、その生成は、山地は約1000万年前のもの（新第三紀赤湯層）とされ、それが浸食され堆積し平地（第四期砂・礫・粘土）が形成されている<sup>1,2</sup>。この中でも高畠町から石材として採取されたものは通称「高畠石（凝灰角礫岩）」と呼ばれ、建造物に広く利用されている。その様子は視点場である道路空間からもよく目に付き、凝灰岩の景観をまち中の近景に形成しているだけではなく、すぐ背景の山地には高畠石を切り出した岩肌が露頭し、近景・中景・遠景の構成の中で黄褐色の風合いのある高畠石の景観を成している。晩秋や早春には主にコナラやミズナラで構成される雑木林の葉が落ち、山肌の自然な凝灰岩の露頭も目立って見られるようになるが、同時に常緑針葉樹であるアカマツの存在が際立つ。地質図と植生図<sup>3,4</sup>を並べると、凝灰岩帯にはアカマツの自然植生および二次群落・植林が重なる。先駆種であるアカマツは、土壌の養分が少ない乾いた日当たり良い場所を好む。つまり凝灰岩が露頭する山地はアカマツには適地であるため、群落として発達したほか、積極的に植林し材を得てきた。マツタケはこの副産物である。これも地域的な特徴が景観に現れている。また、勾配の急な斜面地やその斜面が浸食され堆積した緩斜面で日当たりと水はけが良い場所はブドウやナシの果樹園として利用され

ている所が多く、地勢に沿った相応しい土地利用の典型が見られる。

このように高畠町では、地形、地質、植生、石材等資源利用、土地利用、そこから派生する産業、全ての結果として現れる景観が、凝灰岩帯を基盤にしたものとして色濃く現れており、それが地域性を特徴づけている（表7-1）。この分かり易い自然と人間関係を「まちづくり」においても共通基盤として実際に引き継ぐ事ができれば、自ずと地域の特性を背景にした一貫性と強度のある「まちづくり」を展開できるのではない。それは、地域のブランド力を形成することにもつながる。

表5-1 凝灰岩帯（高畠石）からみる地域の特徴

|                                              |
|----------------------------------------------|
| ①高畠石が多種多様に、そして多数利用されている（石碑石仏、建材、敷地境界ほか）。     |
| ②石材利用の歴史的な変遷を見ることがきる（古墳から再利用舗装材まで同一地域で見られる）。 |
| ③採石、加工、施工まで産業としての纏まりがある。                     |
| ④様々な価値観で石材が利用され生きた文化財が身近に観察できる。              |
| ⑤露頭、浸食・運搬・堆積、植生、土地利用、資源利用など、地域景観の基盤である。      |

## 5. 高畠石を主題とした「まちづくり」の活動

ここでは「まちづくり」の定義はさておき、「高畠石」がまちづくりに繋がる可能性のあるものとしてどのように積極的に扱われてきたかについて、内容が顕著なものを拾い上げ一旦整理した（表7-2）。

表5-2 高畠石を主題とした活動

| 目 的       |                                                  | 建<br>材<br>利<br>用 | 景<br>観<br>形<br>成 | 文<br>化<br>継<br>承 | 体<br>験<br>・<br>学<br>習 | 記<br>録<br>・<br>展<br>示 | 芸<br>術 | 住<br>民<br>参<br>加 | 観<br>光<br>・<br>余<br>暇 | 商<br>店<br>街<br>活<br>性<br>化 |
|-----------|--------------------------------------------------|------------------|------------------|------------------|-----------------------|-----------------------|--------|------------------|-----------------------|----------------------------|
| 1958      | 「高畠の石碑石仏―教師と生徒の共同研究」<br>（高畠の石碑石仏刊行会）             |                  |                  | ●                |                       | ●                     |        |                  | ○                     |                            |
| 1979～     | 高畠町における高畠石の文化財指定（高畠町）                            |                  | ○                | ●                |                       | ●                     |        |                  | ○                     |                            |
| 1996～     | 昭和縁結び通り商店街における童話をモチーフにした石像の設置<br>（美しい商店街づくり支援事業） |                  | ●                |                  |                       |                       | ●      | ○                | ●                     | ●                          |
| 1997～     | まほろば通り商店街道路拡幅事業における舗装等外構での高畠石の利用（まちづくり景観条例）      | ○                | ●                | ○                |                       |                       |        | ○                |                       | ●                          |
| —         | 高畠石をテーマにした展示とシンポジウム<br>（高畠町郷土資料館）                |                  |                  | ●                | ●                     |                       |        | ○                |                       |                            |
| —         | 瓜割石庭公園芋煮会（高畠町観光協会）                               |                  |                  |                  |                       |                       |        |                  | ●                     |                            |
| —         | 高畠石加工体験（皆川石材店）                                   |                  |                  |                  | ○                     |                       |        |                  | ○                     |                            |
| 2001～2002 | 旧高畠駅舎活用構想、活用企画コンペティション<br>（旧高畠駅舎活用を考えるフォーラム）     |                  |                  | ●                | ●                     |                       |        | ●                |                       |                            |
| 2005～2006 | 「高畠石を彫る」（引地石材店、ゆうきの里さん<br>さん、道の駅たかはた、東北芸術工科大学）   | ●                |                  | ○                |                       | ○                     | ●      |                  |                       |                            |
| 2007      | 「高畠石インスタレーション」<br>（東北芸術工科大学）                     |                  | ●                |                  |                       | ●                     | ●      |                  |                       |                            |
| 2009      | シンポジウム「高畠石の歴史と未来」<br>（東北芸術工科大学）                  |                  |                  | ●                | ●                     |                       |        | ○                |                       |                            |
| 2010～     | 高畠駅周辺空間の利活用<br>（高畠町ワクワクまちづくり協議会）                 |                  |                  | ●                |                       | ○                     |        | ●                | ●                     | ●                          |

●：主たる目的 ○：関連する目的

その傾向を見ると、「高畠石」を扱うことは直接的な資源利用の他に、歴史的・文化的な価値として注目されており、多面的な表情を持つ「まちづくり」のシーンに幅広く落とし込むことができる可能性をうかがわせる。

筆者は特に、地域的な特性の認識に立脚する地域空間の形成とそこでの暮らし（地域の運営・経営）が、今日的テーマである持続可能性や、住民の帰属意識の強化、地域間の経済的な競争において重要な要素と考えており、その気づきの契機として高畠石を主題にした企画を実施してきた。その事例を目的とともに以下に示す。

### (1) 高畠石を彫る2005

東北芸術工科大学美術科工芸彫刻コースの学生6名を高畠町和田地区農村交流施設「ゆうきの里さんさん」に迎え、一二八で切り出された高畠石を再利用して彫刻作品を制作・展示するイベントを実施した。事前に高畠町の成立ちを解説するとともに、作者それぞれに地域性の読解を行い、その結果制作されたものを通じて間接的に地域環境へ意識を向けてもらうことが目的であり、同時に交流会がその目的を補う仕組みであった（図7-1～図7-3）。

### (2) 高畠石を彫る2006

東北芸術工科大学建築・環境デザイン学科の学生4名を高畠町「道の駅たかはた」に迎え、端材の高畠石を再利用して彫刻作品を制作・展示するイベントを実施した。事前に高畠町の成立ちを解説するとともに、参加者全員で地域性の読解を行い、サイトスペースフィックとなることを意図した共同制作を行った。その結果制作されたものを通じて間接的に地域環境へ意識を向けてもらうことが目的であり、地元メディアを通じてその意図を伝えた（図7-4～図7-6）。



図5-31 「高畠石を彫る'05」  
制作風景



図5-32 「高畠石を彫る'05」  
展示風景



図5-33 「高畠石を彫る'05」  
作者と地域の交流



図5-34 「高畠石を彫る'06」  
制作風景



図5-35 「高畠石を彫る'06」  
展示風景



図5-36 「高畠石を彫る'06」  
メディア紹介

### (3) 高畠石のインスタレーション2007

東北芸術工科大学建築・環境デザイン学科の学生4名を高畠町内に迎え、前年「高畠石を彫る'06」で制作した作品を、高畠石にゆかりのある場所に再展示し、インスタレーションを行った。無数の石像群が町内各地に配置・撮影され、そのイメージの集積を行うことで、それらを目にした人の視覚と意識の中に、地下に横たわる凝灰岩の存在を顕在化させることが目的であった（図7-7～図7-9）。



図5-37 「高畠石インスタレーション'07」作品 凝灰岩の石量から伸び出る石の芽



図5-38 「高畠石インスタレーション'07」作品 凝灰岩の砂礫の堆積から伸び出る石の芽



図5-39 「高畠石インスタレーション'07」作品 石鳥居を親に見立てた子としての石の芽

#### (4) 石碑石仏をテーマにした散策マップの作成

高畠町和田地区に立地する農村交流施設「ゆうきの里さんさん」は、一般観光客ほか大学ゼミ、地域内外から訪れる研修等で利用される施設である。この周辺には高畠石で制作された石碑石仏が多数存在しており、滞在中の活動メニューとして、石碑石仏めぐりながら散策するためのマップおよび解説が求められていた。その要望に応えることを目的に2005年にマップを制作した。また、このマップを用いて郷土史家が石仏を解説して巡る散策イベントが同年開催された（図7-10～図7-12）。



図5-40 「里山野道散策マップ」表紙・解説面



図5-41 「里山野道散策マップ」地図面



図5-42 マップを活用した散策イベント

#### (5) 旧高畠駅舎周辺活用

2010年から高畠町高畠地区にある3つの商店街の若手が集まり「高畠町ワクワクまちづくり協議会」が立ち上げられ、中心市街地の活性化を目的に人材の連携強化が図られてきた。これまではそれぞれの商店街で事業を行うことが多く連携が少なかった。協議会のワークショップでは地域の特性を捉えることから始まり、街の中で何ができるのかを検討した結果、中心市街地のシンボルとなっている旧高畠駅舎（昭和49年廃線になった高畠鉄道の中心駅で、RCを主構造とする高畠石礎石造）の活用が支持された。しかし耐震強度の問題から現段階では内部利用が困難であるため、その存在感を活かした周辺空間の活用実験を展開している。高畠石でできた空間の魅力を伝えつつ、それを商店街の賑わいや経済振興に繋げることが目的である（図7-13～図7-18）。



図5-43 旧高畠駅舎前の活用イメージ



図5-44 旧高畠駅舎前の活用イベント（展示）高畠石の調査結果を披露



図5-45 イベントでの旧高畠駅舎の一部開放



図5-46 イベントで開発された「高畠石量パイ」



図5-47 高畠石をテーマにしたポストカード



図5-48 旧高畠駅舎前の夜間イベント利用

## (6) アニメーションおよびのポスター制作

高畠町における「地域活性化まちづくり推進事業」を担うべく2009年に「おれたちにまかせろ未来宣言」実行委員会が設立され、各種事業が展開されたが、その中心事業の一つに町を代表するキャラクターの制作とそのアニメーション化、そのキャラクターを用いた高畠町観光ポスターの制作が行われた。両者共に地域の表情を十分に反映し情報発信することを目的に、最も特徴的なロケーションとして旧高畠駅を強調して扱った（図7-19～図7-21）。



図5-49 アニメ「MAHOROBA」のオープニング カルデラをなす山地を表現



図5-50 アニメ「MAHOROBA」主人公が町に降り立つシーン



図5-51 旧高畠駅前で出会いのシーンを表現した町の観光ポスター

## 6. まとめと今後の展望

これまでの高畠石の扱いや関連する各種取り組みをみると、その利用は、石材を加工して直接的に扱う材料的利用と、既に建設・設置された石造物を扱う空間的利用と、高畠石がまとう価値等を扱う意味的利用の3つに大別できる。完全に分類することは不可能であるが、3つの大分類からさらに今後の高畠石の活用の方角性を6つに整理する（表7-3）。

表7-3 高畠石の活かし方の方向性

|       |                                                                                                                        |
|-------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 材料的利用 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・建設材料として使う（切り石、舗装材、外壁材、碎石、塗り物、リサイクル）</li> <li>・製品として使う（プロダクト製品、工芸品）</li> </ul>  |
| 空間的利用 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・空間を使う（イベント、生活）</li> <li>・景観として活かす（観光、余暇、生活空間）</li> </ul>                       |
| 意味的利用 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・高畠石を主題として地域を学ぶ（シンポジウム、体験、見学）</li> <li>・価値や意味を伝える主題とする（アート、文化財、情報媒体）</li> </ul> |

高畠町一帯に賦存する凝灰岩の量は膨大であるが、地形、環境、土地利用的に考慮すると採取できる量は限られており、資源的にも消費財として有限であると言える。したがって材料的利用、空間的利用を行う場合は、これまでに切り出されストックされている石材を有効に使うことや、古材を再利用することが求められる。再利用はもともと多く見られるが、今後は石材化している資源の全体量を地域的に把握し、ストック量と利用量のバランスを鑑みる系統的な資源管理のシステムも考えて行く必要がある。

また、高畠石に関する全ての利用において、これまで見てきた地域の特性としての意味付けとその情報発信が求められる。それがなければ単なる石材的価値のみになってしまう。

「まちづくり」には終わりがなく、時代により価値観、優先順位は変化する。しかし高畠石という地域の特性は、この地域を成り立たせる基盤そのものである。この揺るぎのない特徴を、地域住民のより多くが認識するだけで、まちの見え方とその認識に基づく活動が変わってくるに違いない。そして高畠石の特徴はその扱われ方にもある。文化財として認定されたもの以外にも、沢山の石の文化があり、多様に自由に石

が利用されている（図7-22）。この生きた石文化の中での暮らしも大きな特徴である。その文化を継承すること、つまり高畠石を適切に相応しく使い続けることが今後の課題である。使ってこそ生きる石の文化である。



図5-52 敷地境界のであり、隣人どうしが腰を付けて話をする場となる高畠石

---

#### 参考文献

- 1) 山形応用地質研究会『山形県地学のガイド』コロナ社、2010年
- 2) 経済企画庁総合開発局『土地分類図（表層地質図—平面的分類図—）山形県』1973年
- 3) 横浜国立大学環境科学研究センター『高畠町現存植生図』1983年
- 4) 環境庁『第3回自然環境保全基礎調査（植生調査）現存植生図山形県米沢／赤湯』1984年

## VI. 遺跡文化遺産に関する研究

# 戸塚山175号墳の発掘調査

北野博司

### 1. はじめに

地域の文化遺産は土地の自然資源と深く関わりながら形成され、それらが重層的に蓄積されて「地域らしい」歴史的風致を醸し出す。米沢市戸塚山古墳群は置賜盆地の独立丘陵に営まれた古墳時代中期～終末期の群集墳で約200基が確認されている。このうち約180基をしめる終末期古墳群は、丘陵部に産出する石材を利用して横穴式石室を構築している。本調査はその構造と石材環境がどのような関係を有するのか、利用石材の異なる周辺地域の古墳と比較しながら考察するのが目的である。

2010・11年度は小型石材が豊富な戸塚山西麓の106号墳・176号墳の調査を実施した。2012年度は、良質な石材に乏しい戸塚山東麓の175号墳（米沢市大字浅川字堤入所在）を対象に発掘調査を行った。

### 2. 古墳の立地と墳形

戸塚山175号墳は東に開く谷の最奥部にあり、東西にのびる丘陵の南斜面裾に立地している。現地の微地形は、丘陵斜面から谷底までの間に広いテラス状地形があり、この平坦面に石室が開くよう設計されている。この場所は谷奥にありながら、古墳と谷口・平野、双方からの眺望が良い。終末期古墳の立地は必ずしも眺望を重視するものではないが、本墳の立地には上記のような特徴が指摘できる。

上浅川A支群は大小2基からなる小支群で、規模は175号墳が直径14m、隣接する174号墳は約10mである。戸塚山ではこのような大小2基を単位とする例が森合西支群や森合東支群、上浅川E支群で認められる。群集する金ヶ崎、飯塚北、飯塚南の3支群でこのような単位を見出すことは難しいが、西麓以外に分布する支群の一つの特徴といえ、支群造営の集団あるいは家族を考える際の基礎となろう。

墳形は円墳で東西幅から直径14mに復元できる。石室が開く南側は弧を描かず、列石が直線状をなす。したがって南北は周溝北端から羨門入口までは10mほどとなる。昨年度、調査した106号墳においても斜面裾側は緩い曲線を描くように列石を巡らせており、傾斜地では必ずしも正円にこだわっていないようにみえる。

### 3. 墳丘造成

第1トレンチと墳丘盛土の試掘の結果、水平盛土を基本に墳丘造成を行っており、墳丘内で列石は確認していない。2011年度の米沢市教委による西側のトレンチの所見も合わせると、墳丘と墳裾の高低差が大きい南半を中心に石積みを施したものと考えられる。戸塚山古墳群ではこれまで金ヶ崎支群（34・35号墳）や飯塚北支群（101号墳、106号墳）で墳丘内の調査例があり、いずれも墳丘内は盛土によって構築され、土留めの列石が周囲をめぐる構造となっている。列石の用材や表面観には違いがあり、その石積みと盛土の相互関係、施工プロセスが具体的にわかるような調査例はまだない。

高畠町北目古墳群や同鼠持古墳では墳丘材料に中小の角礫を用い積石塚風に築く。円礫を含む土石混交盛土の高畠町金原古墳や円礫主体の米沢市牛森古墳のような例がある。これらは、地表下に豊富に凝灰岩角礫がある北目古墳群や、河川円礫を入手しやすい金原古墳のように、それぞれ古墳が立地する周辺環境に応じてある程度石材が選択された結果と考えられる。置賜地方の終末期古墳は、墳裾に列石を巡らせて墳丘を区画するという共通した系譜下にありながらも、石材環境にあわせた材料選択がこのような差異を生んだのではないかと推察される。

### 4. 横穴式石室

玄室内は2011年度に米沢市教委が発掘調査を行い、盗掘を免れた馬具（轡、鞍金具）や武器（鉄刀、鉄鏃）、刀子、耳環、土器が出土した。今年度は調査が終わった玄室石積みの実測図を作成した。石室は全長7.05m、玄室の床面プランは胴張形で、玄室長3.5m、玄室幅は中央で2.0m、奥壁側が1.3m、玄門側が1.5m、高さは奥壁際で1.9m、玄門幅0.75m、玄門の高さ0.75mを測る。なお、石室は地盤等の影響から南側に地滑りしており、変形を被っている。

全長約7.0mの石室は、現在、置賜地方で知られているものの中では最も大きい。戸塚山の東に位置する天神裏古墳（米沢市教委1999）、長手2号墳（山形県教委1953、手塚1986）、4号墳（米沢市教委1999）はいず

れも全長5.0m前後と類似した規模をもつ。これらは玄室長：羨道長が1：1に割り付けられており、高畠町の終末期古墳群と共通性をもつ。木和田古墳（米沢市教委1998）は全長不明ながら、玄室長が約3.3～3.5mと175号墳に近い。戸塚山106号墳は全長5.1mと前者に近いが、玄室長3.0mと比較的大きい玄室に幅の狭い短い羨道が付く。これらから、置賜地域では7世紀後半代に石室の全長が約7.0mと約5.0mの2つのサイズクラスがあったことがわかる。

玄室床面の平面形が長方形の胴張りプランを示すのは、戸塚山古墳群など小型石材で石室を構築する際の標準形である。石材は大きさや面形の揃いなもので構成され、石積みの横目地の通りは悪い。戸塚山でも、天神裏古墳や長手2号墳のように、奥壁には鏡石1枚を立てる例が多いが、ここでは2枚としている。これらの点から石材の選択規制はさほど高くはないといえる。

玄門袖石は東西とも小口3段積みとし、床面基盤の礫上に置いているようにみえる。高畠地域では縦長の袖石1石に楣石が直接のものが一般的であるのに対して、戸塚山では106号墳や176号墳も含め、多段積みが見られる。しかしこれらでは下部の袖石は縦使いであり、175号墳の横置きとは異なっている。これらも石材環境とその選択性に関わる特徴といえるかもしれない。

羨門は玄門袖石と同様に石材は小口積3段としていた。これは106号墳と共通する構造である。羨道入口は前庭部と約30cmの段差があり、一段上がって石室に入る。

## 5. 前庭部の構造と土器祭祀

羨門に接して墳丘前面には石積みを施す。さらにその前面からは幅2.0mの石敷きのテラスが検出された。石室に入るステージのような施設である。テラスの石敷きは羨門前の一對の置石設置後に行われている。西の置石の上には、土師器杯2個体以上が置かれ、羨道入口の床面上には須恵器杯1点が伏せ置かれていた。前者は層位からみて中甕と小型杯類よりも新しい。後者は106号墳でも玄門前と羨門前でそれぞれ検出された祭祀行為である。杯の倒置には、両古墳とも8世紀第2四半期～半ば頃の土器が用いられていた。追葬終了等に関わる儀礼の意味が込められているのかもしれない。

石敷きテラスの西側床面上から中甕1個体が潰れた状態で検出された。口縁部片が一部持ち去られた可能性はあるが、破片の出土状態からここに据え置かれたとみた。前庭部や羨道の両側に甕を置く事例は県内では高畠町安久津2号墳等に類例がある。大甕を据える事例は群馬県で多数の報告例がある（高崎市剣崎長瀬西遺跡、藤岡市東平井古墳群など）。安久津2号墳例は、前庭部の袖状施設の下から検出されており、古墳構築後の初期埋葬に伴って行われた儀礼行為と考えられる。羨道入口の西側に1個体、東側に2個体が置かれ、これらと一緒に小型の蓋杯が出土している。うち杯蓋5点と小壺2点が東側の甕の中から、杯身7点が西側の甕の破片と混じって出土したという。本墳の前庭部西側で出土したのは中甕であり、共伴したのは打ち割られた須恵器杯身4・土師器高杯1であるが、これらと共通した儀礼行為とみてよからう。このような大甕等を前庭に据え置くパターンが古墳築造直後の儀礼として存在したことは確認できよう。

高畠地域の古墳では前庭部祭祀の土器セットに長頸瓶・フラスコ形瓶、ハソウなどの液体貯蔵具を伴う事例が多い。戸塚山では調査事例は少ないものの、106号墳では前庭部に甕類がなく、瓶類とともに周溝から散乱した状態で出土した。175号墳でも長頸瓶の頸部は第1トレンチの周溝埋土から大甕破片とともに出土しており、最終的には墳丘上で破砕、廃棄された可能性が高い。

## 6. まとめと今後の展望

古墳の造営時期を示す遺物としては前庭部西側から一括出土した土器類がある。5～8の杯は口径10.6～11.2cmと小型で深身の形態をもつ。底部は手持ちヘラケズリとする。類例は高畠町安久津2号墳の袖状施設下層や同町高安窯跡群C1号窯（東北芸術工科大学2008）にあり、7世紀後半に比定できる。ただし、杯の法量は前者より大きく、相対的に新しい要素をもつ。小型の杯部を有する土師器高杯は高畠町味噌根2号墳に類例があり、時期的には7世紀末～8世紀初頭を中心とする土器群であり、矛盾はしない。

羨道入口から出土した杯9は口径14.0cm、器高3.5cmと扁平な器形が特徴で、底部はヘラ切り未調整とする。類似品の良好な一括資料はないが、高畠町味噌根窯跡（山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館1995）の杯類は底部手持ちヘラケズリ主体ながら器形の扁平化が進んでいる。8世紀第2四半期と考える。昨年度、市教委の調査で玄室内から出土した薬壺型の黒色土師器の短頸壺もほぼ同時期とみられる。

以上のように、出土土器から本墳は7世紀後半のある時点に築造され、最終的には8世紀第2四半期頃まで埋葬・祭祀行為に使用されたと考えられる。その間の追葬の回数や該当する土器については現時点では不明とせざるを得ない。

本稿は別に刊行した『置賜地域の終末期古墳6』2013年3月、を要約したものである。紙数の関係で参考文献は割愛した。



図6-1 戸塚山175号墳調査区全景



図6-2 前庭部石敷きテラス



図6-3 前庭部須恵器中甕出土状況



図6-4 横穴式石室実測風景



図6-5 前庭部調査風景

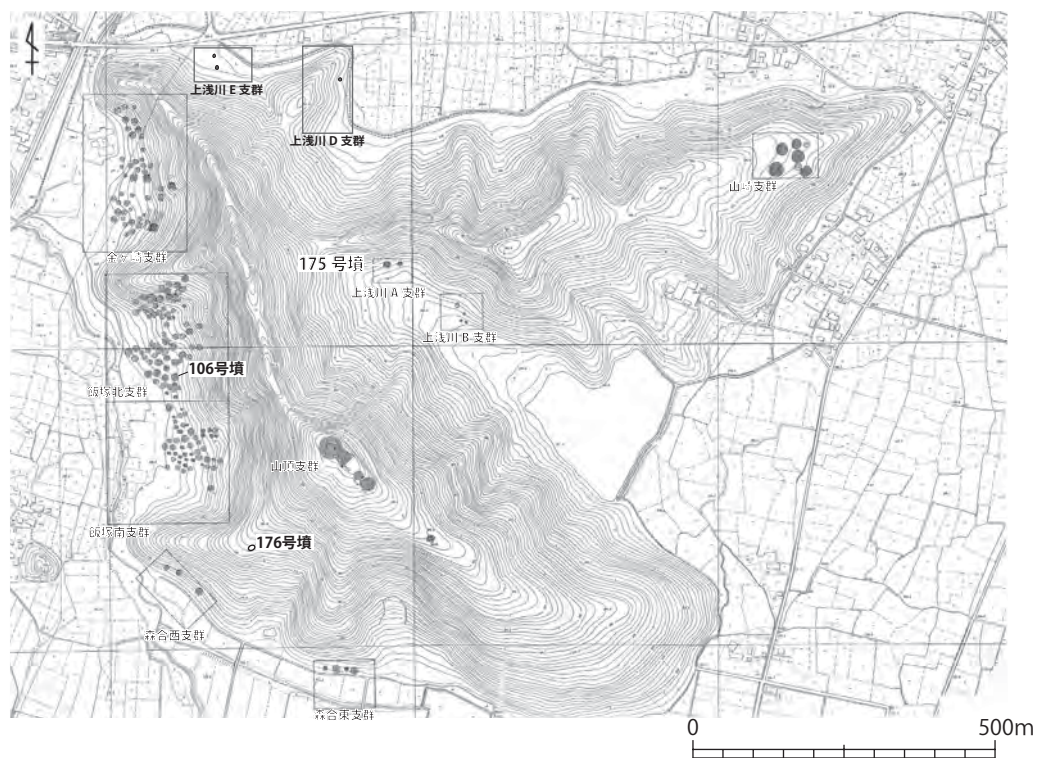


図6-6 戸塚山古墳群分布図（米沢市教委1984より、一部改変）

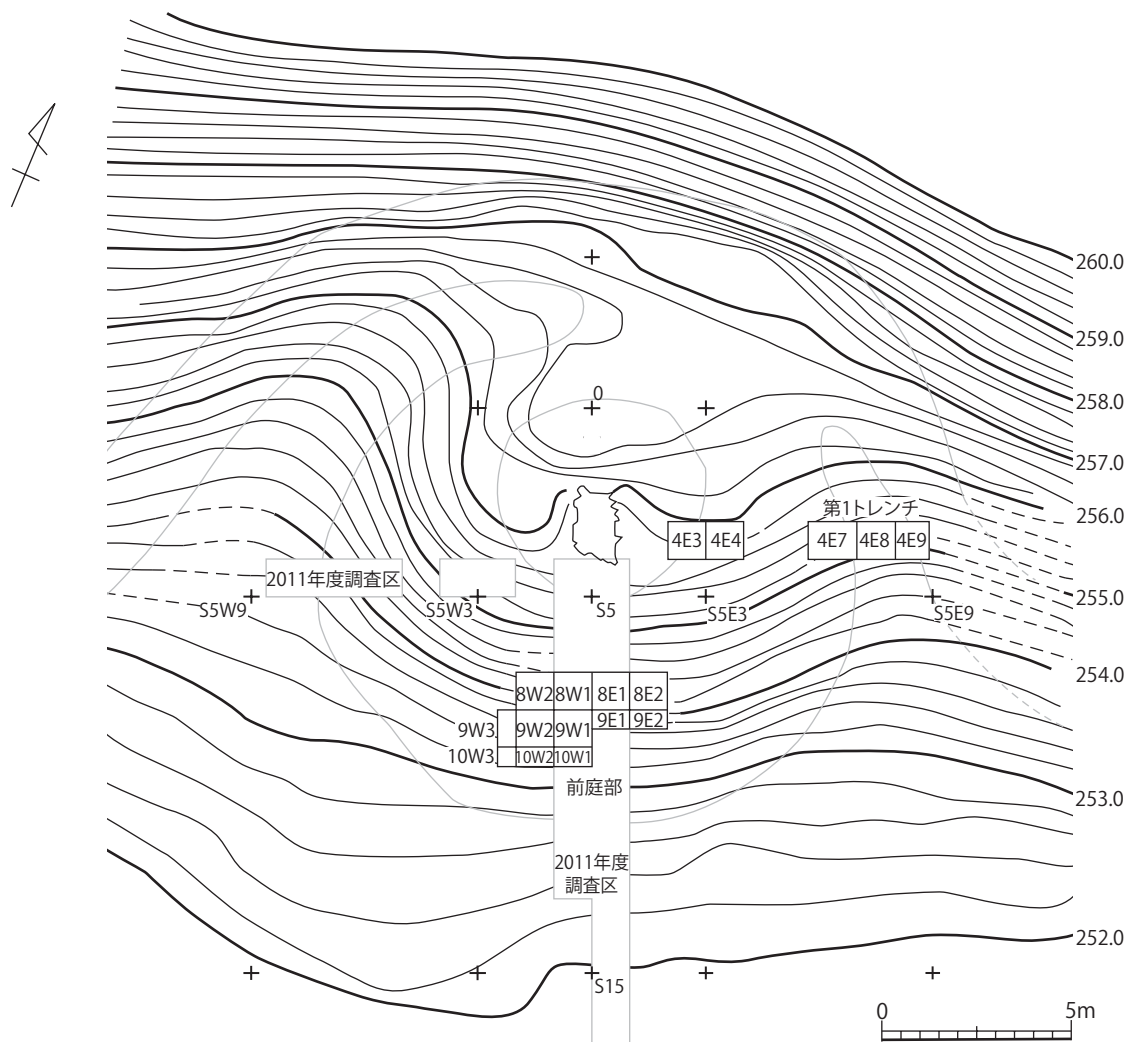
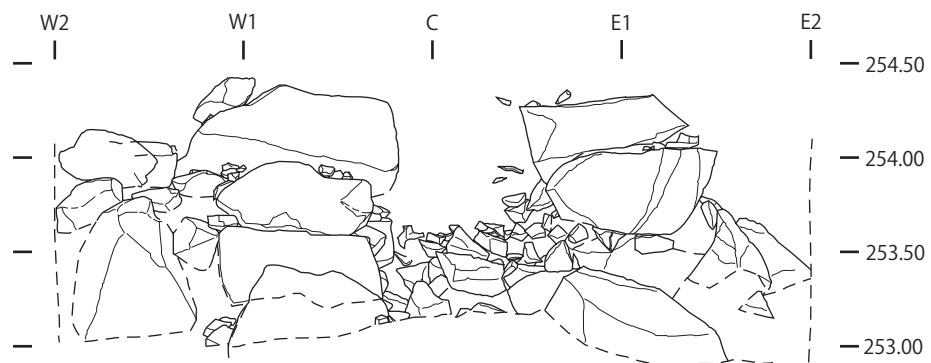


図6-7 調査区配置図

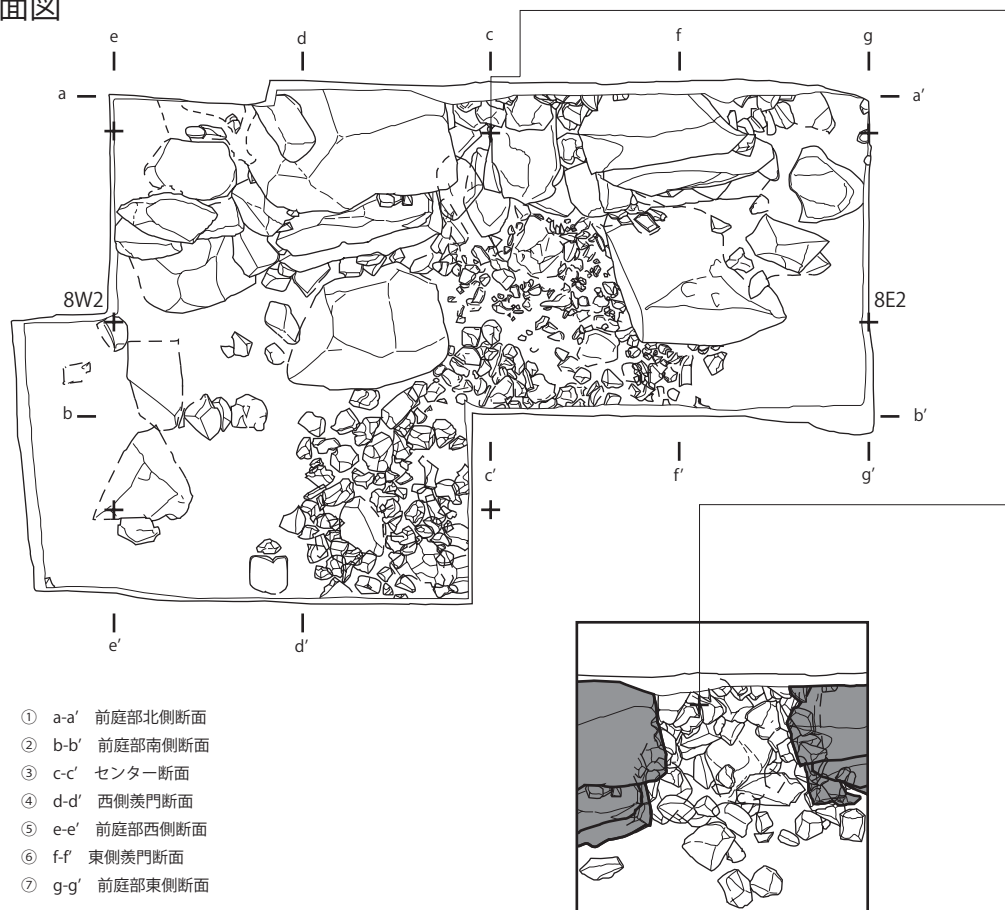


図6-8 玄室実測図

## 前庭部立面図



## 前庭部平面図



羨道床面上の崩落石材



図6-9 前庭部平面図立面図



図6-10 前庭部出土土器平面図

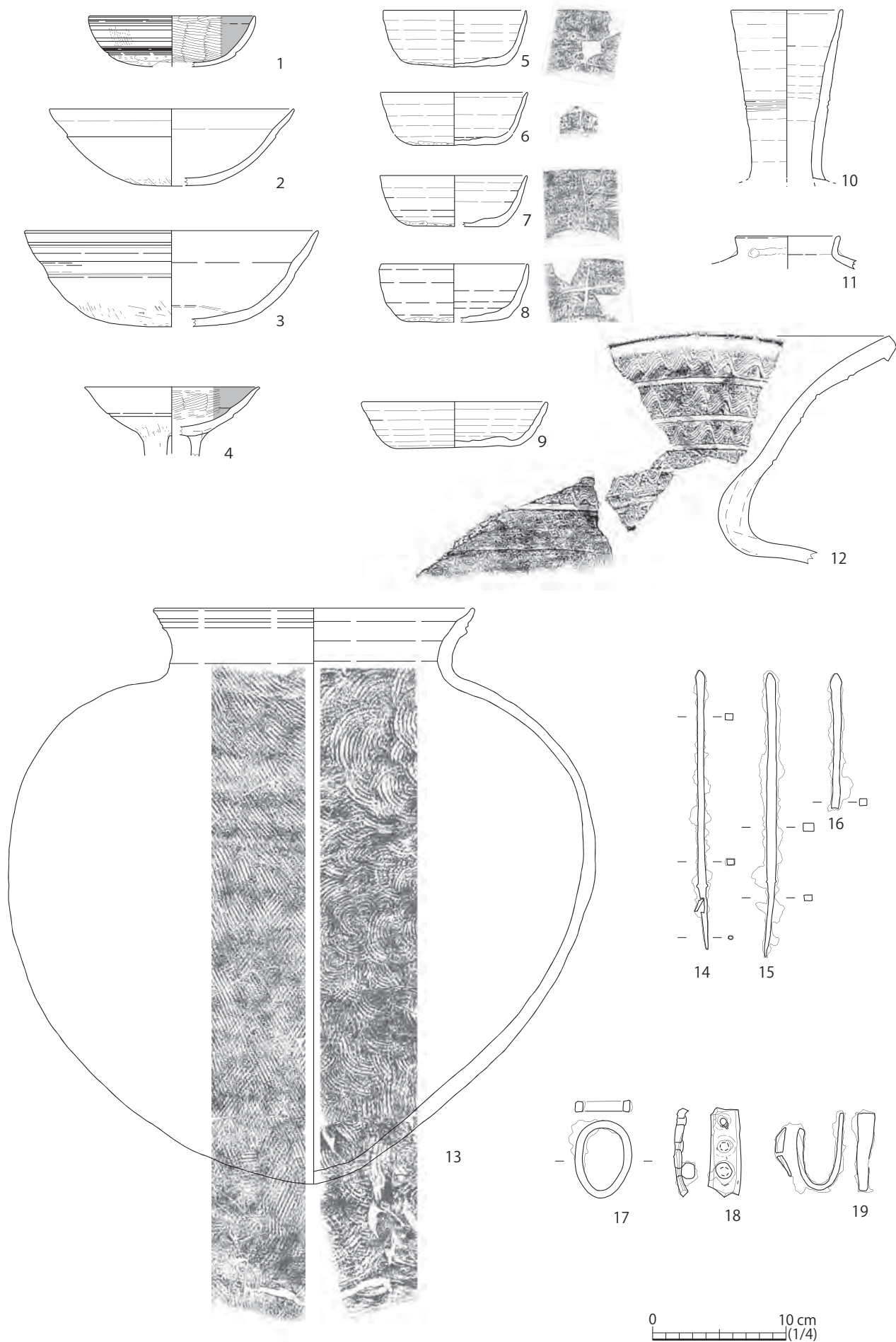


图6-11 出土遺物実測図

# テーマ1 小結

岡田 靖

## はじめに

本研究は、一言でいえば地域に残る文化遺産の総合的な保護を目的とした研究である。その目的のために、本研究では2つのテーマを設定し、相互が段階的かつ連動的に展開する研究方法をとっている。そのうちのテーマ1の研究目的は、地域に潜在する文化遺産の再発見とその把握、そして地域の文化遺産価値の新たな創出による文化遺産意義の向上である。本研究は平成24年度の本年度で研究の3年度目を迎え、5年間の研究期間の約半分を経た。節目ともいえる3年目の研究成果の詳細については本報告書で報告した通りであるが、ここでは、今一度これまでの研究の展開について振り返ってみたい。

本研究の初年度目（平成22年度）は、先行研究であるORC事業における研究の蓄積があるとはいえ、その実践者である本センターの研究員らのほとんどが県外出身者であり、地域に何があるのか、地域の歴史文化の背景はいかなるものかといった状態からの手探りの中での研究開始であった。初年度目は、本研究の採択を受けたのが夏季頃であったため実質半年間ほどの活動期間ではあったが、対象地域として設定した西川町・大江町・高昌町の3町において地域文化遺産の悉皆調査を開始し、町史や関連文献などの読み込みなどから対象地域に関する知見を積み、連携体制をとった各町の教育委員会の担当者や文化財審議員の方々と協議を重ねつつ、各町の歴史文化の背景の把握と文化遺産の所在確認に努めた。

研究2年度目は、初年度目の活動において得られた各地域の歴史文化背景への知見や文化遺産の把握から、それぞれの地域の固有性についての考察に基づいて特徴的な文化基盤から研究のキーワードを導き出し、より効率的な研究の進展を図ることとした。制作者、為政者、信仰、素材、生活、自然資源などの文化遺産にまつわる研究キーワードを軸に地域文化の独自性を絡めた着眼点によって研究展開を図ることにより、次第に地域に潜在する文化背景が浮かび上がってきた。

そして3年度目には、2年間で掘んだ地域文化の特徴に対するさらなる進展を目指し、各キーワードでの研究深度を高めつつ、分野横断的な研究視点を強化して地域文化の面的な理解に努めた。以下、簡略ではあるが3年間の研究成果のまとめと今後の展望について述べたい。

## 研究キーワードごとの成果と今後の展望

まず、制作者に着目した文化遺産の研究では、各地域での悉皆的な調査の実践によって、古典彫刻、東洋絵画、油彩画の各表現分野において文化遺産価値の再評価へと繋がる成果を得た。それらの各分野での成果は、本研究において重点的に取り組んでいる当該地域における近世および近代の文化遺産の解明に繋がりがつつある。林家仏師の研究に関連する京都七条仏師の山形での動向や、その弟子たちの活動の解明は、作家研究にとどまらない当該地域の文化交流の解明に繋がる成果となっている。また、仏像、油彩画、書画類などを保存修復的な視点において展開した研究によって、文化遺産の技法材料に関する新たな知見を得ることができ、美術史的な作家の評価にとどまらない成果を得ている。

本研究で取り組んでいる新海竹太郎は、師である林治郎兵衛や医師・南画家の細谷風翁との交流、米沢市出身の建築家伊東忠太との親交が知られ、また大江町出身の絵師菊池華秋を導き、甥である新海竹蔵を指導したことなど県内人との盛んな交流が知られている。また本研究で取り組んでいる高橋源吉は、竹太郎と同時代の作家であり、彼らが東京で所属していた美術団体での関係性から見ても現実的な交流があった可能性も考えられる。同時代、同地域における文化遺産の制作者たちは、現代よりも近い関係性の中で、表現分野の領域を超えた同時代的な空気を共有していたことであろう。今後は、それらの解明に取り組むことで、今まで個々の作家の活動の点として着目してきた制作者たちの関係性を、同地域の作家交流において展開した同時代的な視点による面的側面からみることによって、地域の総合的な文化的活動を浮き彫りにしていきたい。

為政者に着目した研究では、大江氏に焦点を当てた研究を展開してきたが、中世のころの遺物は残念ながらほとんど残されていない。しかし、近世になると大江氏は軒並み曹洞宗へと宗旨替えし、現在の寒河江市内には室町時代に寒河江大江の各代の城主らを開祖として建立された曹洞宗の寺院がある。今後、それらの寺院の調査にも着手し、最上氏に滅ぼされるまでの大江氏の文化的展開について探求していきたい。

山形における重要な信仰基盤である出羽三山信仰の研究では、神仏分離による影響によって多大な損害を

被った江戸時代以前の仏教系信仰形態の解明を目標として様々な展開を図ってきた。明治の神仏分離の影響は150年近くを経た現代においても絶大であり、江戸以前の信仰をひた隠しにしながら守ってきた人々の苦難の思いが感じられる。歴史研究によって知られる江戸時代の出羽三山信仰の隆盛の様子は、明治期から戦後の苦しい時期を経た現代の山形においてはそのほとんどが失われ、残された文化遺産から当時を偲ぶにとどまっている。改めて調査研究を進めてみると、失われたものの大きさを実感するばかりである。しかし、失われたものよりも残されたものに目を向けたい。明治時代に強制的に廃されてしまった仏教系の遺産は、人知れず地域に埋もれているものも多くあるであろう。また、本研究のような多角的な視点による調査研究によって、従来の研究法では見えなかった事実が見える可能性も多分にある。そのひとつに、本報告書で報告した旧本道寺の遺品に黄檗宗関係の遺品を見つけた新見解などがある。神仏混淆の修験道の視点だけではなく、より多角的な研究展開によって出羽三山信仰の新たな意義の検証を図りたい。

また、その他の宗教活動（民間信仰・檀家寺・祈祷寺・神社など）に関する文化遺産の研究では、対象地域に残る仏像、獅子頭、面、掛軸、絵馬、天井画などの入念な調査を展開したことにより、地域の住民らによる信仰の様相が明らかとなりつつある。それらの信仰は、農作物の豊穰の願いであったり、舟運や街道交易での商業の発展を祈願したものであったり、または身体健康や延命への願い、没者や祖霊への祈りなどの表れであり、その信仰の証として多くの諸物が寄進されたのである。そこに見えるのは、当時の人々の生活そのものである。それと関係して、生活文化に着眼した民家の研究では、その建築様式の変容を辿ることで、地域の生活の様相が見えてきた。特に大江町小清地区の研究では、江戸時代には青苧栽培、明治以降には養蚕、戦後からは林業といった、住人の生業の変遷がその建物の様相から知ることができ、地域の生活文化が克明にみえてきたのである。今後は、建物内の部屋の名称における研究を広域的に進めることで、庄内、置賜、村山と江戸時代に区分された歴史背景に起因する文化圏の関係性について明らかにしていきたい。

自然資源の文化的利用に着目した研究では、本年度の平成24年度までの実践で14回を数える地道なまちあるき活動によって、当該地域での高畠石利用の分布や利用方法などが明らかとなり、地域の生活と産業の解明に至る大きな成果を得ている。この「高畠まちあるき」の活動は、地域住民が立ち上げた「高畠石の会」との連携による活動において本研究における特筆すべき成果を得ている。地域住民自らが調査に加わり、その価値を共有することは、町内の貴重な文化的遺産を保護していくための最も重要なポイントになるからである。まちあるき活動における地域住民と一体となった研究調査体制は、他の分野での調査活動における模範であり、今後他の調査における実践を目指していきたい。

## 全体のまとめと今後の展望

テーマ1の研究目的は、地域に残る文化遺産の把握とその価値の創出である。テーマ1において把握された文化遺産や、外部研究員を交えた多角的な研究によって得られた文化遺産の新たな価値の創出は、各時代、各分野における当該地域の文化を浮き彫りにする成果を得るに至っている。これからは、分野ごとに得られた成果をもとに分野横断的な視点において研究展開を図ることで、地域において展開した面的な文化的活動を明らかとし、さらに時代的変遷を辿る視点において地域で展開された歴史を繋ぎ、地元住民によって展開された生活、信仰、政治的影響などにより複雑に発展した文化そのものを見定めることによって、地域における立体的な文化的様相を明らかにしていきたい。その成果は、地域に潜在する文化力を再発見することに繋がるであろうし、それが文化遺産を保護していくための原動力となるであろう。

テーマ1の研究の成果は、地域文化遺産の保護に不可欠な文化遺産への関心や興味を促す第一歩となる。保護活動の実践はテーマ2での活動として便宜的に分けているが、実際的にはテーマ1の活動成果そのものが文化遺産保護の活動の始まりとなっているのである。また、環境調査や清掃活動・応急的修復処置などの保護活動の実践は、テーマ1の研究調査と同時に行われているもので、研究3年目においてテーマごとの研究区分を超えて入り混じっている状態である。「調査」、「価値の創出」、「保護実践」、「教育普及」の4つの活動による本研究は、一時には段階的に展開するが、それらは次第に連動的となり、最終的にはその全てが同時に展開することとなる。その活動形態こそ、保護活動の実践において不可欠な方法であり、一過性の活動に陥らないための方法となるであろう。あとは、それらをたゆまない永続的な保護活動の展開を可能にするシステムづくりにまで研究を発展させていくことが今後の課題となる。そして、現在本センターが行っている活動展開の主体を地域住民や地方自治体へとシフトさせ、文化財保存修復機関である本センターがサポート側に回することで、地域文化遺産の永続的な保護の実現を目指したい。